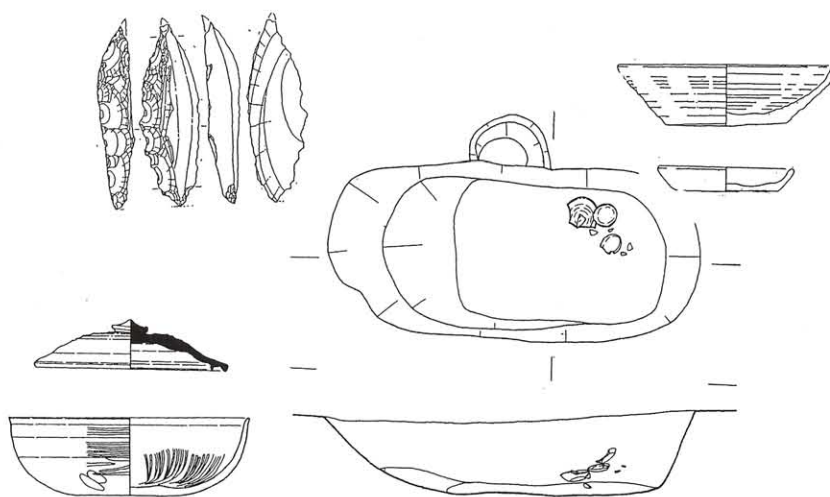


# 東九州自動車道（都農～西都間）関連 埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ

平成15年度



2004

宮崎県埋蔵文化財センター

## 『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第91集

## 正 誤 表

訂正箇所	誤	正
3～6頁 表名	遺跡跡一覧	遺跡一覧
3頁 前ノ田村上第1遺跡 (二次)の本調査面積	49,000	4,900
8頁 表3右上	整理作業棟	東畦原整理作業棟
8頁 表3右下	整理作業棟	現場整理作業棟
15頁 左側16行目	《右を追加》	K区：縄文時代早期(MB0)
24頁 左側8行目	6本の柱穴	底面に6基の小穴
29頁 右側6行目	中半	中葉
29頁 右側10・16行目	前半	前葉
35頁 左側4行目	土器片(小皿片)	土師器片
37頁 右側3行目	大形	大型
39頁 写真39キャプション	MB1石器ブロックと礫群	ML2礫群検出状況
39頁 写真40キャプション	MB1礫群	ML2礫群
40頁 右側4行目	検出されが	検出されたが
44頁 右側4行目	Kr-Kh	Kr-Kb
48頁 写真53キャプション	MB2 礫群検出状況	ML1 遺物出土状況
48頁 写真56キャプション	ML1 遺物出土状況	MB2 礫群検出状況
51頁 左側3行目	20m	31m
51頁 左側4行目	12m	20m
56頁 左側3行目	柱穴6本	小穴6基

※脱稿後、第IV章第1節の表5(旧石器時代調査成果)について、一部遺漏のあることが判明した。本書は例言で述べたように平成15年12月現在の成果をまとめたものではあるが、訂正した表を掲載するにあたり、平成16年3月までに整理作業等で明らかになったデータも追加することとした。

表5 各遺跡における基本層序と検出状況(平成16年3月現在)

遺跡名	ML1	Kr-Kb	MB1	ML2	MB2	MB3
赤石・天神本	—	—	○	—	○	—
中ノ迫第1	—	※	—	—	○	—
野首第2	○	○	○	—	○	○
唐木戸第1	○	○	○	—	—	—
牧内第1	○	○	○	○	○	○
東畦原第1	○	○	—	○	○	○
西畦原第2	—	○	—	—	○	○
上新開	—	○	—	—	○	○
永牟田第1	○	○	—	—	○	—
尾小原	—	○	—	—	—	—

## 【凡例】

- …相当層にて遺構・遺物が出土
- …出土していない
- ※…Kr-Kbに類似した暗褐色土

# 序

本書は、日本道路公団九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が実施している東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書です。

当該区間の発掘調査は、平成11年度から継続して実施しており、今年度は15遺跡で本調査を行い、多くの成果を得ることができました。

本調査された遺跡の時代・性格は多岐にわたっていますが、遺構数や遺物量の多少にかかわらず、どの遺跡も各時代の地域像を解明する上で重要な情報を包蔵していると認識しており、調査時から現地説明会等で状況を公開するよう努めているところです。

また、遺跡の詳細を知るための確認調査は、下半期から主として尾鈴山東麓の台地上を対象に進めており、今年度新たに都農町内の遺跡に着手することとなりました。

それらの成果についてまとめた本書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるための一助となり、学校教育や生涯学習の場で広く活用されることを期待します。

なお、発掘調査にあたって御協力いただいた地元の方々、関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良 弘康

# 例 言

- 1 本書は、平成15年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団九州支社から委託を受け、宮崎県教育委員会が実施した。
- 3 本書の遺跡位置図（図1）は、国土地理院発行の1/50000の図をもとに、それを縮小して作成した。
- 4 本書に記載された遺跡の調査内容・成果は、平成15年12月末現在で把握しているものであり、今後の調査・検討の結果、変更する点が生じる可能性がある。
- 5 本書で用いた標高は海拔高である。方位は基本的に座標北（G. N.）であるが、一部磁北を示す。磁北についてはM. Nと明記している。
- 6 本書に使用した実測図等の浄書は、各遺跡の調査担当者が行った。
- 7 現地での写真は各遺跡の調査担当者が撮影した。
- 8 本報告書で使用する遺構の略号は次のとおりである。  
S A = 竪穴住居跡      S B = 掘立柱建物跡      S C = 土坑      S D = 土壙（墓）  
S E = 溝状遺構      S I = 集石遺構・礫群      S X = 不明遺構  
上記のほか、性格・機能の推定が可能な遺構について、「道路状遺構」などと表記している。
- 9 遺構の深さは、検出面からの値である。本文中には「検出面からの」は略している。
- 10 本書の編集は、調査第一課調査第二係 吉本正典・堀田孝博が行った。執筆は吉本・堀田と各遺跡の担当者が分担した。
- 11 各遺跡の出土遺物、その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



新富町 三財原段丘面俯瞰



牧内第1遺跡(四次) 石器・礫群検出状況



東畦原整理作業棟 礫の整理・接合作業状況



野首第2遺跡 集石遺構(S I 156)



唐木戸第1遺跡(二次) 陥し穴(S C 2)



湯牟田遺跡(二次) K-Ah層上面 遺構検出状況



前ノ田村上第1遺跡(三次) 周溝状遺構



卷頭図版5



尾小原遺跡(二次) 弥生土器出土状況



野首第2遺跡 縄文時代・古墳時代集落



野首第1遺跡 堅穴状遺構(SX2)



銀座第1遺跡(四次) 中世土墳墓

# 目次

- 巻頭図版1：新富町 三財原段丘面俯瞰  
巻頭図版2：上 牧内第1遺跡（四次） 石器・礫群検出状況  
下 東畦原整理作業棟 礫の整理・接合作業状況  
巻頭図版3：上 野首第2遺跡 集石遺構（S I 156）  
下 唐木戸第1遺跡（二次） 陥し穴（S C 2）  
巻頭図版4：上 湯牟田遺跡（二次） K-A h層上面 遺構検出状況  
下 前ノ田村上第1遺跡（三次） 周溝状遺構  
巻頭図版5：上 尾小原遺跡（二次） 弥生土器出土状況  
下 野首第2遺跡 縄文時代・古墳時代集落  
巻頭図版6：上 野首第1遺跡 竪穴状遺構（S X 2）  
下 銀座第1遺跡（四次） 中世土壇墓

<b>第I章 はじめに</b>	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 基本層序	6
第4節 整理作業	8
第5節 現地説明会等	9
<b>第II章 確認調査の結果</b>	10
南中原第2遺跡	10
<b>第III章 本調査の成果</b>	11
銀座第1遺跡（四次）	11
中ノ迫第1遺跡	17
湯牟田遺跡（二次）	22
野首第2遺跡	29
牧内第1遺跡（四次）	37
西畦原第2遺跡（三次）	42
永牟田第1遺跡	47
宮ノ東遺跡	51
赤石・天神本遺跡	15
前ノ田村上第1遺跡（三次）	18
野首第1遺跡	25
唐木戸第1遺跡（二次）	34
東畦原第1遺跡（四次）	40
上新開遺跡	45
尾小原遺跡（二次）	49

## 第Ⅳ章 まとめにかえて 53

第1節 旧石器時代	53
第2節 縄文時代	54
第3節 弥生時代・古墳時代	54
第4節 古代～中世	55
第5節 近世～近代以降	56

## 表目次

表1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡一覧	3
表2 東九州自動車道（都農～西都間）基本層序	7
表3 整理作業を実施した遺跡	8
表4 現地説明会等実施状況	9
表5 各遺跡における基本層序と検出状況	53
表6 縄文時代早期調査成果	54

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 発掘調査の経緯

東九州自動車道の延岡～清武JCT.間は、平成元年2月に基本計画が決定し、それに基づき宮崎県教育委員会では、平成6年度に国庫補助を受け、予想されるルート周辺の分布調査を行い、多くの遺跡が確認されている<sup>1)</sup>。

その一区間である都農～西都間については、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに平成9年12月25日付けで建設大臣（当時）から日本道路公団へ施行命令が出され、それに伴い宮崎県教育委員会は、平成10年度に路線上の遺跡分布調査を行い、計79箇所（896,000㎡）におよぶ遺跡の存在が推定された。

それを受け、宮崎県教育委員会では、協議の結果工事施工によって遺跡に影響が出る部分について、着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成11年度より日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

今年度は平成15年4月1日付けで日本道路公団九州支社と宮崎県との間で契約が締結され、同日から平成16年3月31日までの間、発掘調査が実施されることとなった。

平成15年4月初旬より、昨年度から継続している川南町銀座第1・前ノ田村上第1、高鍋町野首第1・野首第2・牧内第1、新富町東畦原第1・西畦原第2・上新開の各遺跡の調査に着手している。平成15年12月末現在、14遺跡で本調査が実施され、さらに1遺跡で本調査に着手する予定となっている。

また、用地引渡しがなされた箇所、遺跡の広がりや時代、遺物包含層の有無や厚さ、検出が予想される遺構等のデータ収集を目的とする確認調査が18遺跡で実施された。当該事業に伴うものとしては初めて都農町内の遺跡（立野第3・第4）で調査が実施されるなど、小丸川以北の都農町・川南町に調査の比重が移ってきている。

この確認調査の結果、遺物包含層が存在しない、あるいは滅失していると判断された遺跡がいくつか

ある。それらのうち、現段階で報告可能な1遺跡について、第Ⅱ章に概要を掲載している。

調査の終了した遺跡の資料については、順次整理作業、報告書作成作業を実施している。

また調査時に、遺跡の内容について速報的に紹介する現地説明会を、原則として全ての本調査現場で実施する方針で考えている。

註

1) 宮崎県教育委員会『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書2』（西都～延岡・延岡道路） 1995

## 第2節 調査組織

調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 米良 弘康

副所長兼総務課長 大藪 和博

主幹兼総務係長 石川 恵史

副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫

調査第一課長 児玉 章則

調査第一課第一係長 谷口 武範

調査第一課第二係長 長津 宗重

調査第一係

渡部誠一郎 永野高行 新町芳伸 倉蘭靖浩

安藤真二 大山博志 尾園賢二 永山博一

鶴戸周成 山田洋一郎 竹田亨志 安藤正純

阿部直人 加藤 学 小山 博 高橋浩子

興梶慶一 藤木 聡 松本 茂 金丸琴路

調査第二係

横田通久 永田和久 都成 量 大村公美恵

山下健一 原田茂樹 栗山正明 吉富俊文

安藤利光 外山宏幸 長友久昭 藤本典昭

吉本正典 戌亥浩志 河野康男 白地 浩

島木良浩 今塩屋毅行 堀田孝博

調査員（囑託）

松尾有年 小宇都あずさ 川畑真二 嶋田史子

高木祐志 松元一浩 金丸史絵 黒木 修

大野義人

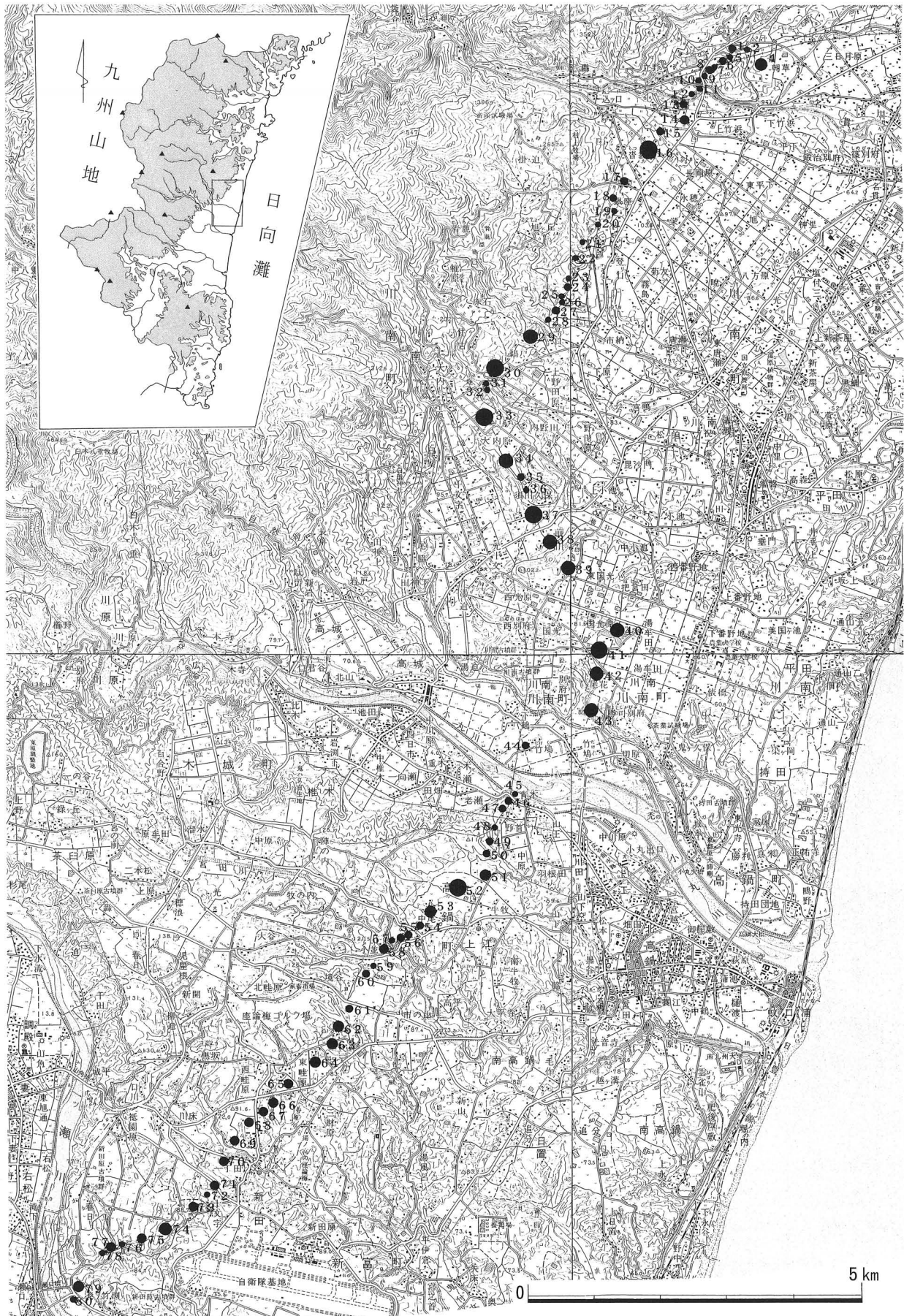


図1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡の位置

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考				
都農町	1	朝倉	都農町大字川北	20,500										
	2	尾立第2	〃	1,100										
	4	朝草原	〃	12,600										
	5	尾立第3	〃	3,000										
	6	尾立第4	〃	12,800										
	7	尾立第5	〃	2,700										
	8	立野第5	〃	13,500										
	9	立野第1	〃	5,200										
	10	立野第2	〃	400										
	11	立野第3	〃	1,600	200	15	確認		15.11.17～12.9	終了				
	12	立野第4	〃	4,000	80	15	確認		15.11.17～12.9	終了				
	13	八幡第1	川南町大字川南	3,800	220	15	確認		15.11.17～12.9	終了				
	14	八幡第2	〃	19,900	1,650	15	確認		15.11.13～					
	15	上ノ原・北分	〃	4,000										
	川南町	16	銀座第1	〃 字前田	33,700	2,140	788	14	確認		14.5.2～5.29			
856										14.10.21～11.6				
2,012							14	本掘(一次)	中世・近世	14.7.8～10.31				
							14	本掘(二次)		14.11.1～15.3.31				
							14	本掘(三次)	縄文[早], 中世	14.12.10～15.3.5				
		〃 字沓袋田	800	15	確認		15.5.7～5.28							
		〃 字沓袋田	3,000	15	本掘(四次)	中世・近世	15.8.19～							
17		銀座第2	〃 字黒岩	7,500	441	14	確認	旧石器, 縄文, 近世	14.5.2～5.30	終了				
					7,059		本掘		14.7.8～15.3.28					
18		銀座第3	〃 字明野	1,300	100	14	確認	旧石器, 縄文	14.5.2～5.7	終了				
					300		本掘		14.6.17～7.31					
19		銀座第3A	〃	300	10	14	確認	—	14.5.2～5.7	終了				
20		登り口第1	〃	2,000										
21		登り口第2	〃	9,100										
22		山ノ口	〃	5,300										
23	谷ノ口	〃	200											
24	市納上第1	〃	6,800	1,500	15	確認		15.11.10～16.1.16						
25	市納上第2	〃	1,100											
26	市納上第3	〃	3,900											
27	市納上第4	〃	4,400											
28	市納上第5	〃	1,400											
29	虚空蔵免	〃	8,200	750	15	確認		15.11.11～						
30	赤石・天神本	〃	45,400	6,630	15	確認		15.9.16～12.25	終了					
31	天神本第2	〃	2,200		15	確認		16.1.26～						
32	大内原	〃	2,900	325	15	確認		15.11.10～						
川南町	33	中ノ迫第1	〃 字中の迫	79,800	2,280	670	13	確認		13.9.12～10.15				
										15.5.1～7.22				
		〃 字丸尾・綿打上			4,100	15	本掘	旧石器, 縄文, 弥生[後]	15.11.12～	調査中				
	34	中ノ迫第2	〃	20,300	720	13	確認		13.10.15～11.30					
	35	中ノ迫第3	〃	10,200										
	36	中ノ迫第4	〃	2,300										
	川南町	37	前ノ田村上第1	〃 字須田久保	20,100	500	900	13	確認		13.9.11～11.15			
										13.12.13～14.3.29				
										14.4.4～10.11				
										14.10.15～10.30				
										14.12.12～15.3.31				
		〃 字須田久保			49,000	14	本掘(二次)	旧石器, 中世, 近世	15.4.4～5.9					
					4,300	15	本掘(三次)	弥生[後], 中世, 近世	15.6.23～12.12	終了				
38		前ノ田村上第2	〃	14,100	2,154	13	確認		13.9.12～11.20					
39		赤坂	〃											
40		国光原	〃											
川南町	41	湯牟田	〃 字湯牟田	25,000		1,350	13	確認		13.10.2～11.29				
										13.12.10～14.3.29				
										14.4.3～7.31				
										750	15	確認		15.5.1～7.4
				9,950	15	本掘(二次)	縄文, 弥生[後]	15.8.28～	調査中					
42	西ノ別府	〃	13,000											
43	尾花A	〃	21,400											

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覽

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
	44	竹鳩	高鍋町大字上江字五郎丸	7,100	516	13	確認	—	13.10.2～10.5	終了
	45	青木	〃 字崩戸	800	65	13	確認	縄文, 中世	14.1.16～1.23	
					585	14	本掘		14.5.1～7.18	終了
					39	12	確認		12.8.7～8.21	
	46	野首第1	〃 字野首	6,800→ 10,600	145	13	確認	縄文, 古墳, 中世, 近世	13.12.17～12.27	
					10,416	14	本掘		14.1.15～3.29	
						15			14.4.8～15.3.31	
									15.4.1～	調査中
	47	野首第2	〃 字青木	11,700	150	12	確認	旧石器, 縄文[早・後] 古墳, 古代, 中世	12.6.19～6.28	
						13			12.8.7～8.22	
					6,850	14	本掘		12.9.28～10.13	
						15			13.3.12～3.16	
									13.5.7～14.3.29	
									14.4.3～15.3.31	
									15.4.1～	調査中
	48	南中原第1	〃 字北中原	10,200	200	13	確認		14.2.26～3.18	
					120	15	確認		15.5.1～6.23	
	49	南中原第2	〃 字北中原	3,500	180	15	確認	—	15.5.1～6.23	
					110	13	確認		13.6.8～7.5	
	50	老瀬坂上	〃 字北中原	3,800→ 6,000	6,490	14	本掘	旧石器, 縄文[早], 古代	13.9.3～14.3.29	
						14			14.4.3～12.9	終了
					210	12	確認		12.6.19～6.28	
									12.8.7～8.22	
	51	下耳切第3	〃 字下耳切	22,500	6,790	12	本掘(一次)	古墳～古代	12.9.4～13.3.30	
					7,000	13	本掘(一次)	縄文[中・後], 古墳～ 古代	13.4.4～14.3.29	
					6,800	14	本掘(二次)	縄文[早]	14.5.23～8.29	終了
									12.6.15～6.28	
									12.8.7～8.22	
	52	北牛牧第5	〃 字牛牧	27,800	200	12	確認	旧石器, 中世	12.10.2～10.11	
					9,800	13	本掘(一次)		12.9.4～13.3.30	
					8,000	13	本掘(二次)		13.4.4～14.3.29	
					300	13	確認		14.3.6～3.8	
					2,000	14	本掘(一次)	旧石器, 縄文[早]	14.5.7～8.29	
高 鍋 町	53	唐木戸第1	〃 字北唐木戸	17,600	700	14	確認		15.2.3～2.24	
					5,500	15	本掘(一次)	旧石器, 縄文[早], 中世	15.5.6～9.5	終了
	54	唐木戸第2	〃 字北唐木戸	5,600	480	13	確認	縄文, 中世	14.3.11～3.22	
					4,200	14	本掘		14.9.2～15.3.7	終了
					25	12	確認		12.6.19～6.22	
	55	唐木戸第3	〃 字北唐木戸	2,900	25	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	13.2.13～2.15	
					2,875	14	本掘		13.10.15～14.3.29	
									14.4.3～7.30	終了
					88	12	確認		12.6.19～6.27	
	56	唐木戸第4	〃 字北唐木戸	4,100	7,812	13	本掘	旧石器, 縄文[草創・早]	12.8.7～8.10	
					→8,010	13	確認		13.5.7～12.27	
					110	13	確認		14.2.4～14.2.22	終了
	57	唐木戸第5	〃 字北唐木戸	2,400	200	13	確認	—	14.2.25～3.6	終了
					650	13	確認		13.5.13～6.8	
	58	小並第1	〃 字西小並	→7,050	7,050	14	本掘	旧石器, 縄文[草創・早]	13.9.3～14.3.29	
						14	本掘		14.4.3～12.25	終了
	59	小並第2	〃 字黒土田	2,700	50	13	確認	—	13.5.13～6.8	
					220	13	確認		4.2.6～2.25	終了
					296	12	確認		12.8.7～8.11	
									12.10.2～10.16	
					2,104	12	本掘(一次)	旧石器, 縄文[草創]	12.11.6～13.3.30	
	60	牧内第1	〃 字牧内	14,400	3,400	13	本掘(二次)	旧石器, 縄文[草創]	13.4.3～14.3.29	
					3,700	14	本掘(三次)	旧石器	14.1.10～14.3.29	
									14.4.3～11.29	
					4,900	14	本掘(四次)	旧石器, 縄文[草創]	14.9.17～15.3.31	
						15			15.4.1～6.23	終了
									12.8.7～8.11	
	61	牧内第2	〃 字牧内	8,000	56	12	確認	旧石器, 縄文[草創]	13.2.5～2.14	
					529	13	確認		13.6.4～6.27	
					4,715	13	本掘		13.8.20～14.3.29	終了



表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覽

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
新 富 町	62	音明寺第1	新富町大字新田字音明寺	8,500	150	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12.4.13~4.18	終了
						13	本掘		12.6.5~6.14	
						13	本掘		12.9.4~13.3.30	
	63	音明寺第2	" 字音明寺	16,800	200	12	確認	旧石器, 縄文[早], 中世以降	12.6.5~6.14	終了
						13	本掘(一次)		12.7.24~8.1	
						13	確認		12.9.4~13.2.21	
						14	本掘(二次)		14.1.30~2.20	
	64	東畦原第1	" 字下迫口	14,800	712	13	確認	旧石器, 縄文[早]	13.8.6~8.31	調査中
						14	本掘(一次)		13.11.1~14.3.29	
						13	確認		14.4.1~9.30	
						14	本掘(二次)		14.1.30~2.20	
						14	本掘(二次)		14.5.20~12.26	
	65	東畦原第2	" 字中原	7,200	588	13	確認	旧石器, 縄文	14.1.30~2.20	終了
						14	本掘(一次)		14.4.3~8.9	
						14	本掘(二次)		14.9.24~15.2.14	
66	東畦原第3	" 字大中原	9,000	200	12	確認	旧石器	12.7.24~8.4	終了	
					13	本掘(一次)		12.9.9~9.29		
					13	本掘(二次)		12.11.6~13.3.30		
67	西畦原第1	" 字吐合	21,800	250	12	確認	旧石器, 縄文, 弥生[中~後]	12.6.5~6.13	終了	
					13	本掘(一次)		12.7.24~8.3		
					12	本掘(一次)		12.9.9~9.29		
					13	本掘(一次)		12.9.4~13.3.30		
新 富 町	68	西畦原第2	" 字前原	18,300	7,550	14	本掘(二次)	弥生[後], 古代以降	14.5.17~9.30	終了
						12	確認		12.6.5~6.8	
						13	本掘(一次)		12.9.20~10.5	
	69	上新開	" 字上新開	19,900	400	12	確認	旧石器, 縄文	12.6.5~6.8	終了
						13	本掘(一次)		12.9.20~10.5	
						13	確認		13.5.7~14.3.29	
						14	本掘(二次)		14.2.12~3.12	
	70	一丁田	" 字老丁田	14,900	760	14	本掘(二次)	旧石器, 縄文	14.9.24~12.26	終了
						15	本掘(三次)		15.4.3~12.25	
						15	本掘(三次)		14.8.26~9.13	
	71	勘大寺	" 字駒取場	16,900	490	14	確認	旧石器, 縄文	14.11.9~15.3.31	終了
						15	本掘		15.4.1~10.1	
	72	永牟田第1	" 字永牟田	5,100	44	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.7.24~8.3	終了
						13	確認		13.8.6~8.31	
						14	確認		14.9.3~9.25	
73	永牟田第2	" 字永牟田	24,600	37	12	確認	旧石器, 縄文[早]	12.4.13~4.18	調査中	
					14	本掘(一次)		12.7.19~7.28		
					14	本掘(一次)		14.9.9~15.2.28		
					12	確認		12.9.30~10.6		
74	尾小原	" 字尾小原	25,600	90	12	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12.9.30~10.6	調査中	
					15	本掘		15.5.1~6.6		
					12	確認		15.9.11~12.25		
					12	確認		12.6.5~6.12		
					14	本掘(一次)		12.8.1~8.4		
75	向原第1	" 字綿打	15,300	60	14	確認	旧石器, 縄文[草創・早]	12.9.20~10.2	調査中	
					13	確認		14.12.3~12.13		
					12	確認		12.3.23~3.29		
					13	確認		13.5.14~6.1		
76	向原第2	" 字綿打	7,000	350	14	本掘(一次)	旧石器, 縄文[草創・早]	13.11.1~14.3.29	終了	
					15	本掘(二次)		14.4.1~8.30		
					15	本掘(二次)		15.5.1~7.14		

表1 東九州自動車道(都農～西都間)関連遺跡一覧

市町	番号	遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	年度	種別	主な遺構・遺物の時代	調査期間	備考
新富町	77	藤山第1	〃 字綿打	3,600	42	13	確認	縄文[早], 古墳	13.11.1~11.20	
					500	14	本掘(一次)		14.6.3~7.15	
	78	藤山第2	〃 字藤山	2,200	60	12	確認	縄文[早]	12.7.24~8.4	
				940	本掘		12.9.4~13.1.9		終了	
西都市	79	宮ノ東	西都市大字岡富字宮ノ東	21,900	800	11	確認		12.1.24~3.29	
					410				15.7.3~9.2	
					3,400	15	本掘	弥生, 古墳, 古代, 中世, 近世	15.10.6	調査中
	80	宮ノ前	〃 字宮ノ前	200	12	12	確認		12.9.25~9.27	終了

注\* 「遺跡面積」は当初の想定遺跡面積。「調査面積」は実掘りの表面積。

### 第3節 基本層序

当該事業に伴い発掘調査が実施される遺跡は、北は尾鈴山系の東麓付近から、南は一ツ瀬川左岸に至る範囲に点在している(図1)。

特に小丸川と一ツ瀬川にはさまれた地域は、牛牧原・三財原・新田原といった標高70~90mの洪積台地が展開しており、対象となった遺跡の多くが台地上に立地している。

そういった台地上(特に三財原段丘面)の遺跡の基本層序については、昨年度の概要報告書にも記載されているとおり、共通の層名・テフラ名を付して共通理解を図っている<sup>2)</sup>。表2の「略称」の列がそれであり、出土層位が問題となる旧石器時代や縄文時代の整理や報告を行う上で有効であると考えられる。

ただし、第1節でも触れたとおり、調査地の比重が次第に北に移りつつある。当然のことながら層序の状況も漸移的に変化している。

例えば、唐瀬原面<sup>3)</sup>にあたる川南町大内原面(中ノ迫第1)ではKr-Kb(小林軽石を含む褐色土層)の層準に褐色土がみられるものの、小林軽石のパミスはごくわずかに認められる程度となる。

この唐瀬原面は扇状地性の段丘面で、本来的にはAso-4(阿蘇4火砕流)以上の日向ローム層に覆われる。ところどころ尾鈴山酸性岩(溶結凝灰岩)の礫を含む礫層が挟在する。

今後、層の違いの細部について比較検討していくことが必要と考えられる。

註

2) 宮崎県埋蔵文化財センター『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76) 2003 P5~7

3) 宮崎県『国土調査 土地分類基本調査』(尾鈴山) 1995

表2 東九州自動車道（都農～西都間）基本層序

No.	略称	層名	年代	特徴
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	K r - T h	高原スコリア	AD1235	本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる
4	クロボク			
5	K - A h	鬼界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い
6	M B O	黒褐色ローム		
7	M L 1	暗褐色ローム		
8		桜島薩摩(Sz-S)	11ka	パミスは細かく、シャーベット状のブロックとなっている。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9		褐色ローム		
10	K r - K b		15ka	小丸川以北では識別が難しくなる <u>深年Ⅱ段丘堆積物</u>
11	M B 1	暗褐色ローム		
12	M L 2			径2～3cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。A Tの二次堆積や、土壌化、腐植などの影響でA T本体より色が暗いと思われる。
13	A T	始良T n	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（始良大隅：A-Os）が見られる。
14	M B 2	暗褐色ローム		A T直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。M B 3では白色鉱物が少ない。中部にパミス（A-Fm,A-Ot）が密な部分が見られることがある。
15	A - F m	始良深港	26.5ka	
16	A - O t	始良大塚	30ka	
17	M B 3	暗褐色ローム		
18	M L 3	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	K r - A w	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリア、ラピリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリアを主体とする。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。
21	M L 4	明褐色ローム		
22	K r - I w	イワオコシ	50ka	赤褐色、アワオコシに比べ粗粒。黄褐色パミスを含む。降下軽石を主体とする。 <u>雷野段丘堆積物</u>
23		明黄褐色ローム		
24		キンキラローム		黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。始良岩戸（A-Iw）の風化層。
25	A - I w	始良岩戸	60ka	粗粒砂大～径3mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。A Tより粗粒。 <u>岡富段丘堆積物</u>
26	A s o - 4	阿蘇4	86-90ka	本来は阿蘇4火砕流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火砕流堆積物であるが、風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。

\*年代は、奥野充・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフロクロロジー」（『人類史研究』12 2000）による。未校正。

## 第4節 整理作業

今年度、埋蔵文化財センター本館においては、東九州自動車道関連の24遺跡で出土した遺物の整理作業を実施した。

さらに東畦原整理作業棟において、12遺跡で出土した旧石器時代や縄文時代早期の礫の水洗、注記、接合、計測、接合データの整理等を行った。

礫の接合の結果、例えば小並第1遺跡では縄文時代早期の集石遺構間の礫や、集石遺構と散礫、あるいは集石遺構と土坑の礫が接合する事例や旧石器時代の礫群間の礫が接合する事例があることなどが判明している。

以上の他、発掘作業と並行しながら、現場で出土遺物の水洗、注記の作業を実施し、整理の進捗を図った。

表3 整理作業を実施した遺跡

[本館]

遺跡名	遺物量(今年度分.礫を除く)
銀座第1遺跡(三次)	土器8箱
銀座第2遺跡	土器11箱, 陶磁器2箱, 石器1箱
銀座第1遺跡(一・二・四次)	土器・陶磁器16箱
前ノ田村上第1遺跡	土器17箱, 陶磁器56箱, 石器9箱
前ノ田村上第1遺跡(二・三次)	土器1箱, 陶磁器19箱, 石器1箱
湯牟田遺跡(二次)	土器2箱, 石器13箱
唐木戸第1遺跡(二次)	土器1箱, 石器4箱
唐木戸第2遺跡	土器3箱, 石器1箱
唐木戸第3遺跡	土器2箱, 石器24箱
唐木戸第4遺跡	石器8箱
小並第1遺跡	土器1箱, 石器53箱
下耳切第3遺跡	土器150箱, 石器145箱
青木遺跡	土器4箱, 石器1箱
野首第2遺跡	石器100箱, 土器250箱
老瀬坂上遺跡	土器32箱, 石器65箱
牧内第1遺跡(四次)	石器13箱
牧内第2遺跡	土器1箱, 石器8箱
音明寺第1遺跡	土器5箱, 石器55箱
音明寺第2遺跡(二次)	土器1箱, 石器14箱
東畦原第1遺跡	石器9箱
東畦原第1遺跡(二次)	石器9箱
東畦原第2遺跡(一・二次)	土器1箱, 石器15箱
西畦原第2遺跡	石器14箱
西畦原第2遺跡(二・三次)	土器1箱, 石器3箱
尾小原遺跡	土器1箱, 石器22箱
尾小原遺跡(二次)	土器1箱, 石器3箱
向原第1遺跡	土器22箱, 石器4箱
勘大寺遺跡	土器1箱, 石器10箱
上新開遺跡	石器50箱

[整理作業棟]

遺跡名	遺物量
銀座第1遺跡	礫13箱
銀座第2遺跡	礫30箱
老瀬坂上遺跡	礫350箱
小並第1遺跡	礫400箱
牧内第1遺跡(四次)	礫19箱
野首第1遺跡	土器・陶磁器90箱, 石器8箱
野首第2遺跡	土器40箱
音明寺第1遺跡	礫10箱, 石器10箱
東畦原第1遺跡	礫85箱
東畦原第1遺跡(二次)	礫10箱
東畦原第1遺跡(三次)	礫8箱
西畦原第2遺跡(二・三次)	礫53箱
勘大寺遺跡	礫12箱
上新開遺跡	礫30箱

[整理作業棟]

遺跡名
前ノ田村上第1遺跡(二・三次)
湯牟田遺跡(二次)
野首第1遺跡
野首第2遺跡
牧内第1遺跡(四次)
東畦原第1遺跡

## 第5節 現地説明会等

発掘調査時に、速報的に調査成果を伝える現地説明会を、基本的に全ての調査現場で実施している。

また報告会という形で資料を紹介する機会を設けることや、体験発掘を受け入れるなどの普及活動を実施している。

表4 現地説明会等実施状況

実施日	遺跡名	実施時刻	参加者
6月21日（土）	西畦原第2遺跡（三次）	13：30～15：30	33名
7月10日（木）	新富町発掘調査現場全般 * 新富町立上新田中学校にて出前授業実施 * 生徒59名、教職員5名	9：00～12：00	64名
7月12日（土）	牧内第1遺跡（四次） 老瀬坂上遺跡 * 高鍋町中央公民館にて報告会実施	13：30～15：30	92名
7月22日（火） ～ 24日（木）	上新開遺跡発掘体験 西畦原第2遺跡発掘体験 * 教職経験10年経過研修 * 22・23日2遺跡で発掘調査体験実施 * 24日神宮分館にて埋蔵文化財行政に関わる研修実施	13：00～17：00 8：30～17：00	26名
8月5日（火）	上新開遺跡職場体験実習 * 宮崎南高等学校職場体験実習実施 生徒2名・引率教諭1名	8：30～17：00	3名
10月17日（金）	銀座第1遺跡（三次）見学 * 県建設技術協会第2回研修会での現地説明会実施	14：00～15：00	70名
10月22日（水）	湯牟田遺跡見学 * 多賀小学校 児童22名，引率教諭2名	11：00～12：00	24名
10月26日（日）	野首第2遺跡	9：30～15：30	146名
11月25日（火）	野首第2遺跡発掘体験 * 高鍋西小学校 児童34名，引率教諭1名	9：30～11：30	35名
12月19日（金）	赤石・天神本遺跡	13：30～14：30	33名
12月21日（日）	前ノ田村上第1遺跡（三次）	13：30～15：30	79名
3月6日（土）	上新開遺跡 永牟田第1遺跡 尾小原遺跡 * 東畦原整理作業棟	10：20～15：30	

## 第Ⅱ章 確認調査の結果

### 49 みなみなかばる 南中原第2遺跡

#### (1) 遺跡の立地

小丸川を北東に臨む段丘裾部に立地する。標高は40mを測る。もとは谷地であったが、棚田として利用された後、平坦にされたという。

#### (2) 調査の概要

今回の確認調査では、対象地内に24箇所のトレンチを設定したが、T18の旧耕作土下で局部的にK-Ahが残存していた以外は、大小の礫を含む客土や褐色土層、青灰色土層が厚く堆積しており、遺物包含層は確認できなかった。

遺物は、T12の旧耕作土中で、流れ込みとみられる土器片が1点出土したほか、表土中で土器片や陶磁器、剥片等（時期は不明）が数点表採されたのみである。

#### (3) 小 結

全域にわたり客土や礫を多く含む粘質土層が厚く堆積している状況で、出土遺物も原位置をとどめるものではない。

なお北側に隣接する南中原第1遺跡の確認調査もあわせて実施した。設定した14のトレンチのうち、T3を除く全てのトレンチで遺構・遺物が確認された。黒褐色土・クロボク・K-Ah・MBO・ML1の5つの遺物包含層が認められる。



図2 遺跡周辺の地形とトレンチ配置・基本土層(1/2,000)

## 第三章 本調査の成果

### 16 <sup>ぎんざ</sup>銀座第1遺跡(四次)

#### (1) 遺跡の立地

本遺跡は川南町市街地の北西約3kmに位置し、川南町と都農町との町境を東流する名貫川右岸に広がる、標高約120mの唐瀬原段丘面に立地する。

調査地は北東から続く扇状地の緩斜面と、南西の丘陵から続く緩斜面とが形成するなだらかな谷地形部にあり、その南には緩やかに傾斜する平野が広がる。現地形は水田や畑地として削平・造成されており、調査区の北東部から南西部にかけて3箇所の段差が見られる。

#### (2) 調査の概要

これまでに中・近世の溝状遺構・掘立柱建物跡・土坑が確認されている。表土直下K-Ah上の遺物包含層は造成及び耕作によってそのほとんどが攪乱さ

れているため、表土中から中・近世を中心とした土器片・陶磁器片等がわずかに出土する状況にある。遺構はK-Ah面からML1面で検出されている。

#### ①中世

SE4が調査区西半を北西から南東にかけて走っている。最大幅1.2m、深さ0.5mを測り、断面形は弓形を呈する。SE4はその南側にある柱穴群を囲むような形で位置している。埋土中からは龍泉窯系青磁碗・備前系播鉢など6点の中世遺物が出土している。同じくSE11・12は線描連弁の入った龍泉窯系青磁碗・白磁皿を含む中世遺物が出土している。これら遺構の底面では、1.4m×0.4mを測り埋土の硬化した波板状のピット列が検出されており、2条から3条の道路状遺構の可能性はある。

また調査区西側で1基の土墳墓(図5)が検出されている。平面形は長軸1.4m×短軸0.6mの長楕円形を呈し、深さは0.3m、主軸をほぼ南北にとる。墓壇内に人骨は遺存していない。土墳墓内の北西隅からは、床面からやや浮いた状態で、黄橙色を呈する土師器が完形に近い状態で3点出土した(図5)。



図3 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

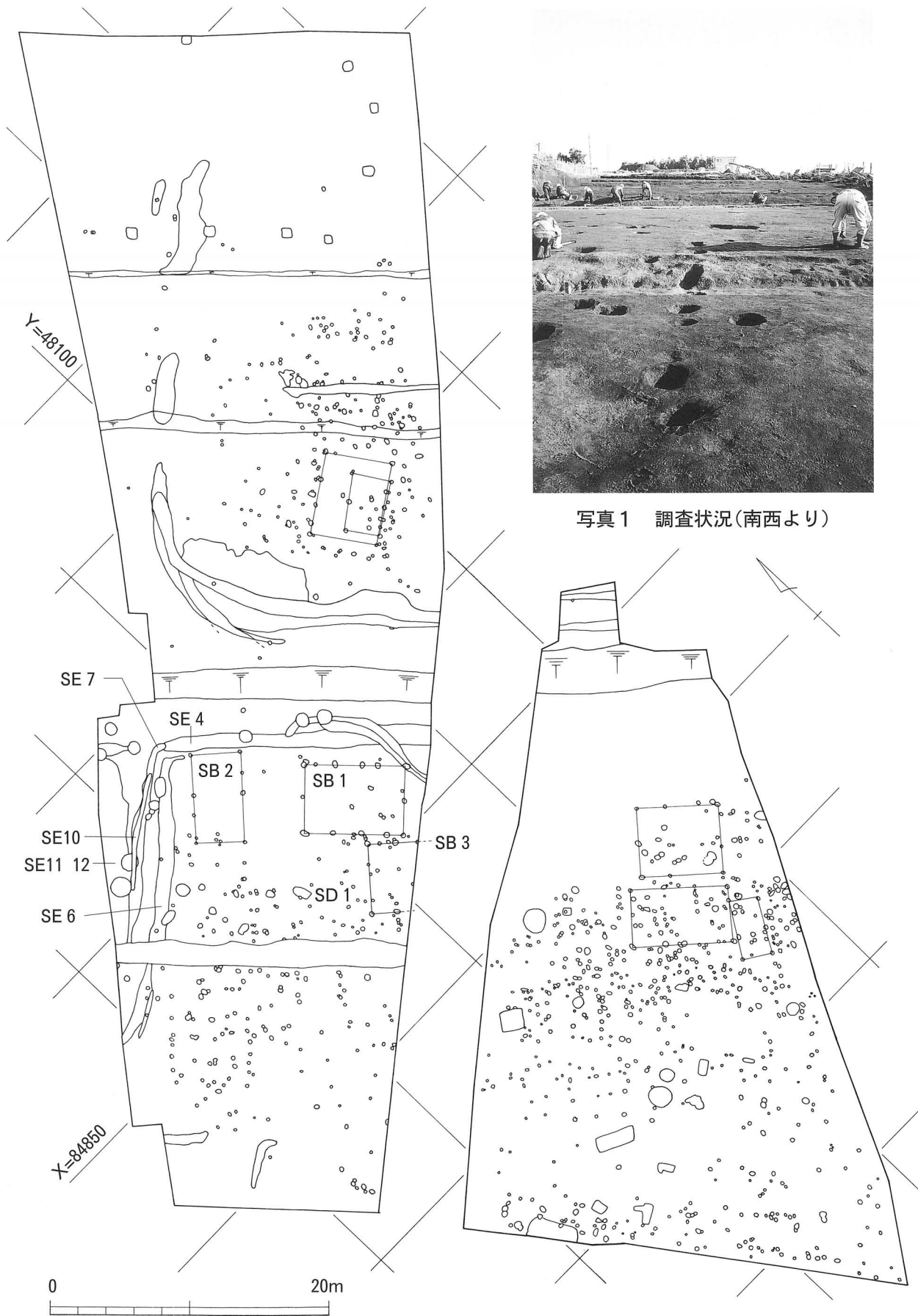


写真1 調査状況(南西より)

図4 遺構の分布(1/400)





写真2 遺構検出状況



写真3 作業状況

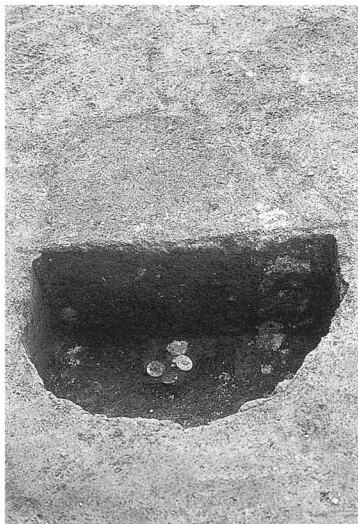


写真4 SB1柱穴半截

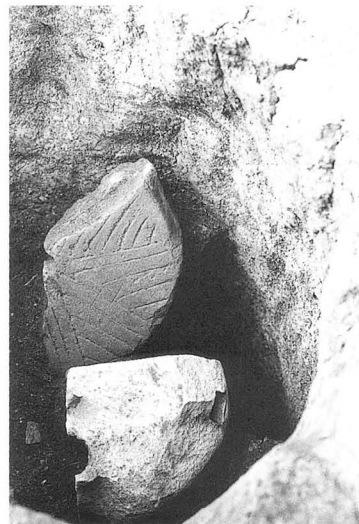


写真5 SB1柱穴 出土石臼



写真6 波板状ピット列

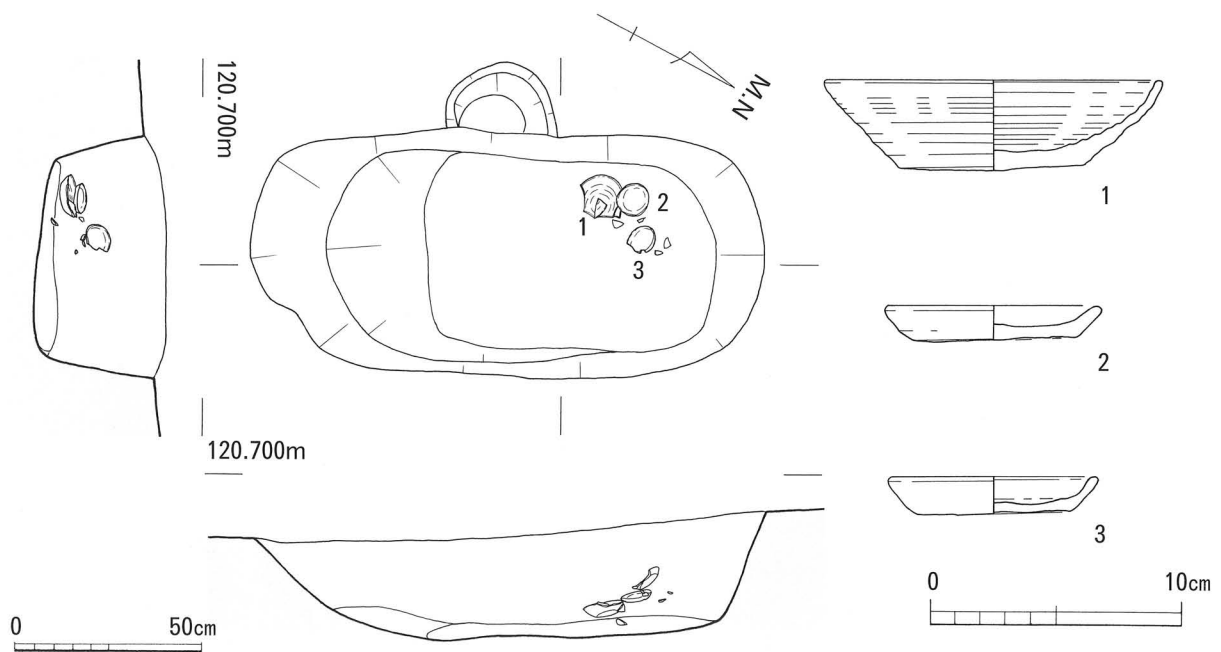


図5 中世土壇墓 SD1 (S=1/20) と出土遺物(1/3)

出土状況からは埋葬時のものと考えられる。1点は杯で体部内外面にロクロ痕が認められ、底部は回転ヘラ切り痕を残す。他の2点は小皿で法量がほぼ等しく、底部はともに回転ヘラ切り痕を残すが、うち1点は木目圧痕を有する。

## ②近 世

調査区西側から掘立柱建物跡3棟が検出された(SB1~3)。後述するように柱間はかなり広い建物がある。そのため柱穴の想定される箇所について繰り返し精査を行ったが、結局検出されなかった。

SB1は桁行4間(7.2m)・梁間2間(4.9m)の平面長方形を呈する。柱穴径は0.4m前後である。深さは0.4~0.9mを測り、柱痕跡が認められる。そのうち柱穴4箇所から複数の銭貨が出土している。銭種は「寛永通宝」がほとんどで、1枚または2~5枚が重なったものである(写真4)。さらに1箇所からは石臼(写真5)・陶磁器片・キセル等が出土している。この掘立柱建物は出土遺物から近世後半のものと同推察できる。

SB2は桁行2間(6.3m)・梁間1間(3.5m)の平面長方形を呈し、柱穴径は0.4m前後、深さ0.5~0.8mを測り、柱痕跡が認められる。

SB3は調査区内で確認されている部分は桁行1間(1.9m)・梁間1間(5.0m)の状況である。深さは0.4~0.6mを測り、柱痕跡が認められる。柱穴から近世後半の京・信楽系陶器碗や銅製の毛抜きが出土している。

## ③時代不明の遺構

SE6は北東から南西にかけて走り、最大幅1.1m、深さ0.4m、断面形は弓形を呈する。このSE6の北半を切る状態でSE9・15を検出している。

またSE6に切られる土坑(SC8)も検出した。SC8は平面楕円形で1.3m×0.8m、深さは1.2mを測る。陥し穴の可能性もあるが、具体的な用途は明らかではない。

SE7はSE6と並行に走り、最大幅0.9m、深さ0.1m、断面は逆台形を呈し、SE10に切られる。

その他、土坑が13基検出されているが、いずれの遺構も出土遺物がないため時代の特定ができない。

## (3) 小 結

遺跡全体として、遺物の出土数が少なく時代を特定できない遺構が多い。その中で中世に関連する遺構としては、溝状遺構と土壇墓が確認されている。溝状遺構については、一次調査区ではその形状・規模から防御的・区画割りの性格が看取されたが、四次調査区においては区画割りの意味合いが強い印象を受ける。

また土壇墓に切られた状態の柱穴が検出されており、中世の掘立柱建物が存在したことも推察できる。溝状遺構や土壇墓で出土した中世遺物からは13~16世紀頃の、さらに掘立柱建物の柱穴出土遺物からは近世後半期における人々の生活の痕跡が認められる。



写真7 中世の出土遺物

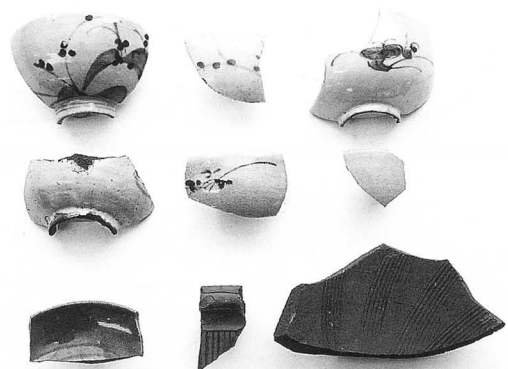


写真8 近世の出土遺物

(1) 遺跡の立地

川南町の北西部、尾鈴山塊の東麓に広がる丘陵と野田原段丘面との境、標高は100mの地点に位置する。北は平田川、南は篠原川に挟まれた緩やかな丘陵端部付近にあたる。

遺跡の東部には、弥生時代後期集落である丸山西原遺跡と川南古墳群(円墳2基)が所在する。

遺跡の大部分は、茶栽培や宅地による大規模な造成工事により削平を受け、旧地形を留めていない。

(2) 調査の概要

調査区を大きくA～M区に区分して、確認調査を実施した結果、B区：後期旧石器時代(AT下位・上位)、G区：縄文時代草創期～早期の遺物を包含するML1・MB0、I区：縄文時代後期～中世の黒色土(II層)が調査対象区となった。

その他の調査区は、攪乱や削平が著しく、本調査対象外となった。

①後期旧石器時代

B区ML2上面で礫群が2基検出された。礫群の

構成礫は全て尾鈴山酸性岩で赤化、破碎が著しい。

遺物は、MB1下部中に剥片尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器が散漫な状態で出土した。これらの遺物は礫群に伴う可能性が高い。

また、AT直下のMB2上位からは剥片、碎片、石核が出土している。

②縄文時代草創期

G区において、ML1上面で隆起(隆帯)線文土器片、石鏃、磨石、台石、石皿、石核、剥片、碎片が約1,100点出土した。

本遺跡で出土した、隆起線文土器の文様帯構成は数条の隆帯文列の下に爪形文を有するもの、カーブを描く垂下隆起線を有するもの、口縁部を折り曲げるようにして隆帯を張り巡らせる3タイプがある。また、石鏃は略正三角形をなし、ほとんどがチャートである。

なお、遺構は検出されなかったが、チャート石核と剥片、碎片と石鏃の集中区や、磨石と石皿がセットで出土する地点が数箇所存在する。

縄文時代草創期の旧地形は、東に延びる丘陵先端部を流れる小河川の河畔付近と復原できた。その岸辺に遺物が集中するあり方を示す。

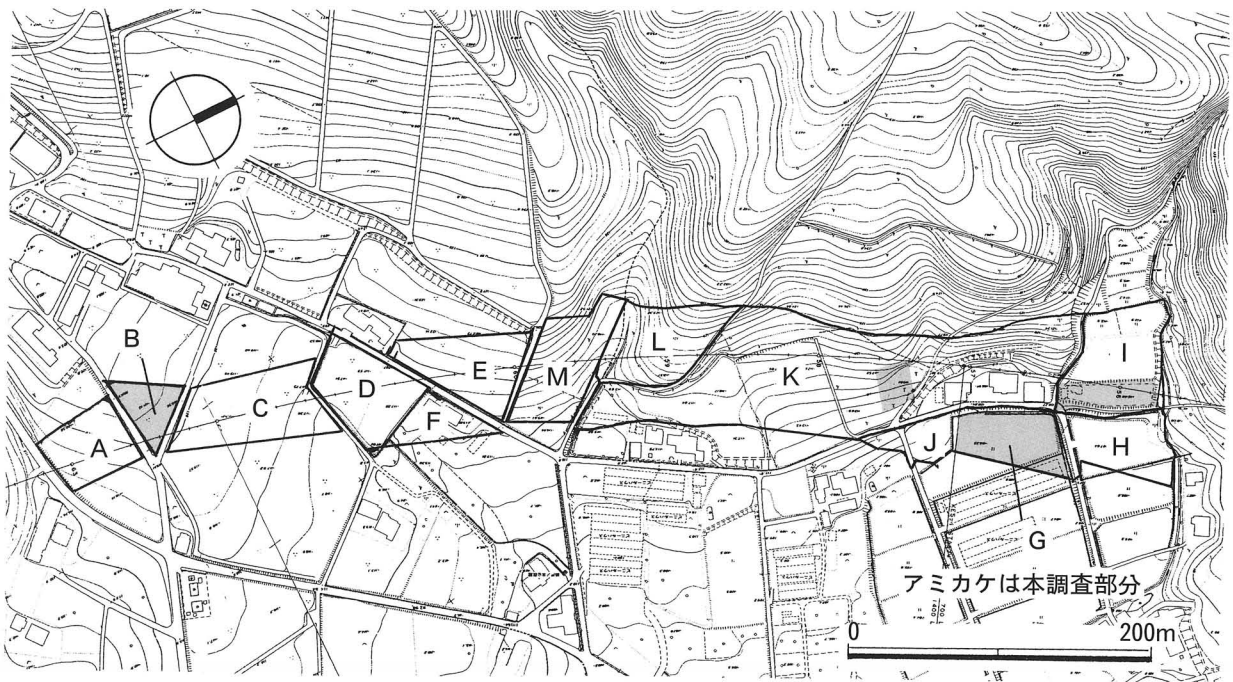


図6 遺跡周辺の地形と調査区(1/5,000)



写真9 調査区近景

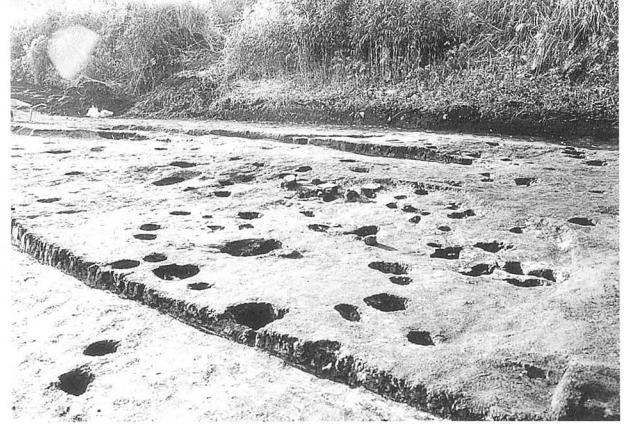


写真10 SA3

### ③縄文時代早期

K区北側の丘陵斜面から谷部に向けた地形変換線上のMB0下面で陥し穴状遺構が2基検出された。

縄文時代早期の陥し穴状遺構は、多くの場合、K-Ah～Kr-Kbまで除去しないと明確なプランが検出できず、正確に遺構検出面を捉えにくいのが、幸いに確認調査トレンチ壁面で掘り込み面と2基の陥し穴状遺構の切りあいを確認することができた。

SC2は平面長径2.5m、深さ1.4m、SC3は平面長径1.5m、深さ0.9mを測る。共に底面には杭痕が確認された。土層断面より、掘り方の大きいSC2の埋没後、小さなSC3がほぼ主軸を違えずに掘削されたと考えられる。

### ④縄文時代後・晩期

I区の北側、開析谷付近に竪穴住居2軒と集石遺構を1基検出した。2軒の竪穴住居の規模はそれぞれ直径4m(SA2)と6m(SA1)である。共に平面円形プランで中央に主柱穴を有す。また、壁面の立ち上がりは緩く断面皿状を呈する点で、野首第2遺跡の住居形態と近似する。

遺物は、縄文土器深鉢、石斧、石鏃、磨石、石皿、剥片などがあるが、浅鉢や台付皿は出土していない。

また、SA2床面上で出土した深鉢内部の埋土より炭化物が数点出土した。種実の可能性があり、フローテーション法の実施でより明確化すると考えられる。

遺構の時期は、遺物から縄文時代後期後半～晩期前半と考えられる。

### ⑤弥生時代後期

I区の縄文時代竪穴住居の東側にて、平面方形で一辺2mの竪穴住居(SA3)が検出された。貼床を有し、主柱穴は2本である。出土した遺物は弥生土器甕と壺、石皿があり、弥生時代後期後半の時期が与えられる。

### (3) 小 結

本遺跡では、後期旧石器～中世にかけての遺構や遺物が検出された。

特に縄文時代草創期の遺物は、隆帯文土器の文様帯や器形から、草創期でも後半期に属すると考えられる。

縄文時代草創期遺跡の希薄だった宮崎平野北端部における確実な出土例の一つであり、且つ、土器や石器組成を知りうる上で重要であろう。

さらに、谷川縁辺部で縄文時代後～晩期と弥生時代後期の竪穴住居を検出した点から、縄文時代草創期の包含層も含め、通時的に居住域が丘陵端部と開析谷から流れる谷川の接点に位置していたといえる。

しかし、竪穴住居は単独で立地するため、集落本体自体は、調査区外の東側に広がる扇状地部分と考えられる。

赤石・天神本遺跡は、児湯郡内における数少ない縄文時代草創期・後～晩期の調査例となると同時に、丘陵端部と段丘面(台地)との地形変換点周辺の遺跡立地を具体的に示す例ともいえるであろう。

### (1) 遺跡の立地

尾鈴山系に属する上面木山の東麓にあり、切原川と篠原川にはさまれた標高約120mの台地上（唐瀬原段丘面）に立地する。

南東約3.2kmのところに、弥生時代の住居跡が検出された把言田遺跡があり、南東約1kmのところに弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された中ノ迫A遺跡がある。

### (2) 調査の概要

調査区中央部に耕作に伴う攪乱箇所があり、調査箇所はその北側の北端部と南側に二分される。確認調査により、いくつかの谷地形の存在が明らかとなっており、中でも南側には比較的大きな谷地形部がある（1号谷）。

調査対象となったのは、谷地形部に堆積しているクロボク（Ⅱ層）、K-Ah下位の褐色土（Ⅵ層・Kr-Kb相当か）及びMB2の各層である。

### ①後期旧石器時代

確認調査では、MB2でナイフ形石器や剥片が出土している。

また、現在掘り下げを進めているⅥ層では、上～中位で礫群が8基確認され、ナイフ形石器、細石刃核、細石刃、剥片などが出土している。

### ②縄文時代

確認調査でMB0より散発的に石鏃が出土している。北端部近くでは、褐色土（Ⅵ層）上面より石鏃が1点出土している。そのほか1号谷では、流れ込んだと目される石鏃、石匙等が出土している。

また、1号谷の埋土中より轟B式土器片が出土している。

### ③弥生時代

1号谷では、埋土中より多量の土器片が出土している。突帯の付された甕や二重口縁壺等がみられる。

### (3) 小 結

Ⅵ層上部の状況は、旧石器時代終末期～縄文時代草創期初頭の状況を示している可能性がある。

弥生時代に関しては、現在、居住関連の遺構の検出を視野に入れて調査を進めている。



写真11 遺跡全景(南より)

（1）遺跡の立地

尾鈴山の南東を流れる小丸川の支流切原川と、平田川の支流綿打川にはさまれた十文字扇状地Ⅱ面上に立地する。十文字扇状地は西から東にかけて緩やかに傾斜しているが、調査地は1948～55年に実施された国営開田事業によって削平・造成されている。標高は約63mである。

（2）調査の概要

弥生時代終末の周溝状遺構、中世の掘立柱建物跡・道路状遺構・土坑、近世の掘立柱建物跡・溝状遺構・土抗が検出された。ほとんどの遺構は表土の直下にあるK-Ah上面で検出され、旧地表面はすでに削平されていた。

①弥生時代

周溝状遺構が1基検出されている。平面形は南北軸長約4.9m、東西軸長約4.9mを測り、隅丸方形を基調とする。溝幅は0.6～0.8mを測り、断面形はほぼ長方形をなし、深さ約0.1～0.3mを測る。遺物は高坏・甕・壺・石包丁が出土しているが、完形品は石包丁1点のみである。出土した高坏等の土器群から弥生終末期の遺構と推定される。

②中世

中世の掘立柱建物群および小穴群はD区北側とC区のほぼ全域で検出されている。最も規模の大きなものはS B36であり、C区南部に位置し、桁行5間、梁間2間の身舎からなる四面庇建物である。庇部分を含めると14.5m×6.5mの規模を有する。柱穴の埋土中から土師器皿や14世紀前半頃の白磁片が出土している。

C区北側の土坑は南北軸長約1.8m、東西軸長約1.0mを測り、隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは約0.2mである。床面中央部から銅銭（洪武通宝等）数枚とガラス製の玉1点が検出された。銭貨は中央部10cm四方の範囲に1枚～2枚重なった状態で3箇所ほどに分散して出土している。銭貨の風化が激しいため、正確な枚数は不明である。遺構の規模と銭貨出土の状況から土壇墓と推定される。

C区北部には、近世の溝SE1に切られる形で東西方向に伸びる道路状遺構が検出されている。SE1を境にして、西側と東側では道路状遺構の様相が異なっている。東側は波板状の掘り込みが見られ、一部に硬化した凹凸部を有する。西側は15～20cm大の礫を敷き詰めた状況が見られるが、この部分が路面として活用されていたのか、路面下の基礎部分なのかについては確定できていない。

遺構の埋土からは、東播系の片口鉢や常滑焼の甕等が出土している。



図7 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)



写真12 一次調査A区及び三次調査区 遺構の分布



写真13 近世の溝、周溝状遺構及び柱穴群

### ③近 世

C区東部に位置するS B38と西部に位置するS B50は、それぞれ一つの柱穴から複数の銭貨（寛永通宝）が出土している。さらにC区全体からは、多量の近世陶磁器が出土している。18世紀後半～19世紀代のものが大半であるが、17世紀代の陶磁器類も少量含まれる。

検出された溝状遺構の埋土からは、いずれも近世の陶磁器類が出土している。

### (3) 小 結

弥生時代に関連する遺構は周溝状遺構1基のみであるが、一次調査においても竪穴住居が1軒検出されており、調査区東側の隣接地に当該期の集落が存在した可能性が高い。

中・近世の掘立柱建物群については、各建物の主軸方位、埋土の様相や深度等を整理し検討を加えることで、新たな情報が得られるものと期待される。

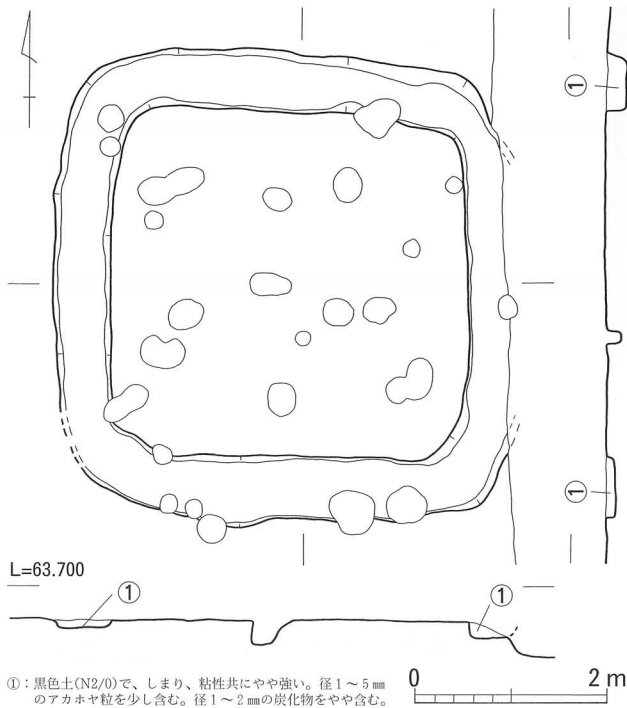


図8 周溝状遺構(1/80)

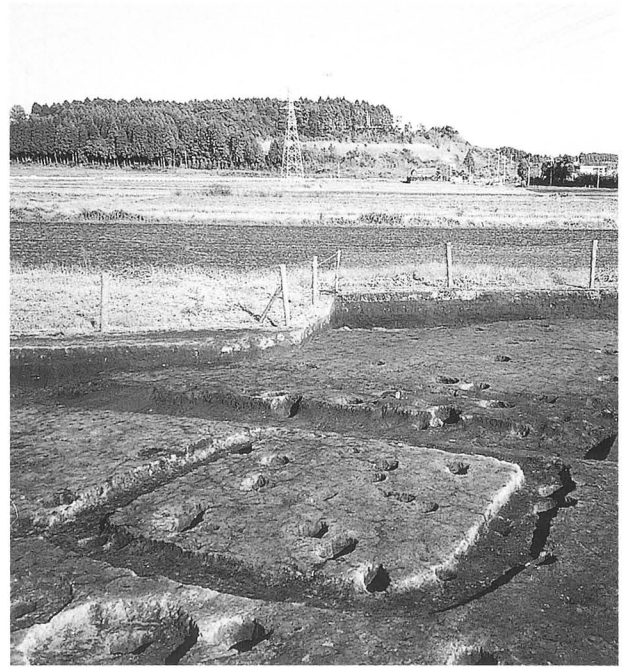


写真14 周溝状遺構



写真15 周溝状遺構出土遺物(1)



写真16 周溝状遺構出土遺物(2)



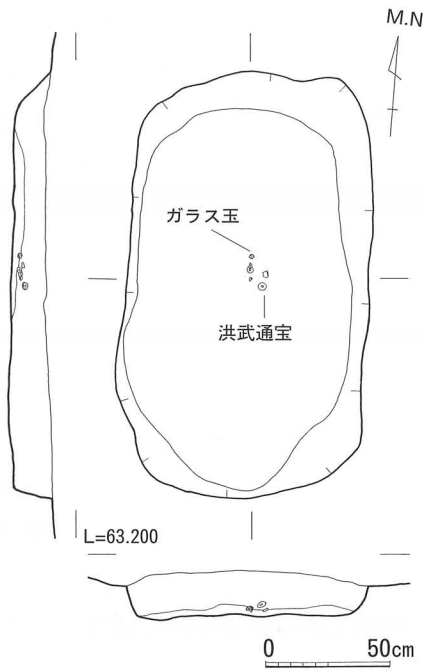


図9 中世土壌墓(1/30)

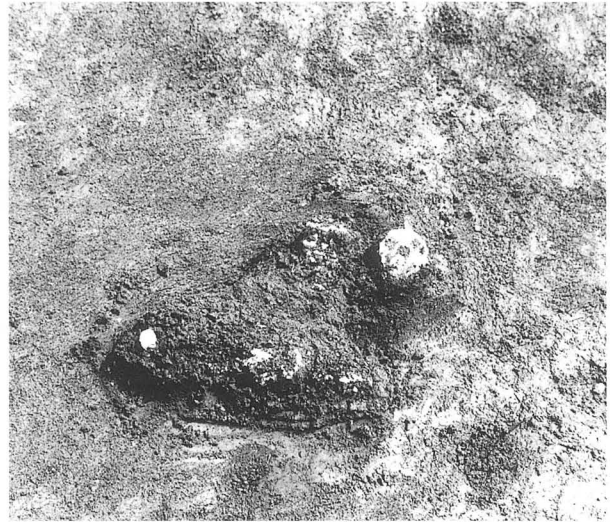


写真17 土壌墓遺物出土状況



写真18 道路状遺構(西より)



写真19 道路状遺構(東より)

## 41 ゆむた 湯牟田遺跡 (二次)

### (1) 遺跡の立地

本遺跡は平田川と切原川に挟まれた国光原台地の南部に位置する。標高は約63m。同じ台地上の弥生時代の遺跡として北東約1kmのところを把言田遺跡、西約500mのところを上ノ原遺跡があり、南西約1km付近の台地上には川南古墳群が分布している。二次調査区の北東側には湯牟田溜池があり、水源が遺跡と溜池の間にある。また、北側にある国光原は10m程度標高が高く、遺跡地の旧地形は谷地形を呈しており、北に向かって緩やかに傾斜している。

### (2) 調査の概要

一次調査で遺跡南側のA～C区の調査を行い、今年度5・6月に実施した確認調査では、北側D・E区の全体にK-Ah及びその上面の黑色土の残存が確認できた。また、黑色土層から掘り込まれたと思われる竪穴住居跡や溝状遺構、土坑等が確認された。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が多数出土した。

また、MB0、ML1で掘り込みをもつ集石遺構

や縄文土器、剥片及び碎片、赤化礫等が出土し、Kr-Kbで礫群及び黒曜石剥片等が出土している。

本調査ではE区の調査から始め、表土を剥ぎ取り黒色土(Ⅱ層)を掘り下げて遺構検出を行った結果、弥生時代以降の竪穴住居跡21軒、溝状遺構8条、土坑9基、小穴群が検出された。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が多数出土している。

#### ① 弥生時代後期から古墳時代初頭

竪穴住居跡21軒、土坑3基(SC2・3・6)を確認している。

SA1は、3.8m×3.8mの方形プランを呈し、厚さ3cm程の貼床をもつ。土器(鉢や器台等)や、鉄器(鉄鏃等)、土製管玉が出土している。遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に比定できる。

SA2は5.0m×5.6mの方形プランを呈する。炭化材が遺構内すべてに広がり焼失住居と考えられる。遺物は土器、石包丁等がみられる。

SA3は、6.4m×7.1mの不定形の大型住居で、遺物は、完形に近い状態で浅鉢や甕、線刻のある紡錘車が出土した。また、楔形石器と思われる石器も出土している。

SA6は、2.8m×3.0mの小振りな方形プランの遺構である。線刻のある壺の胴部～底部が出土した。

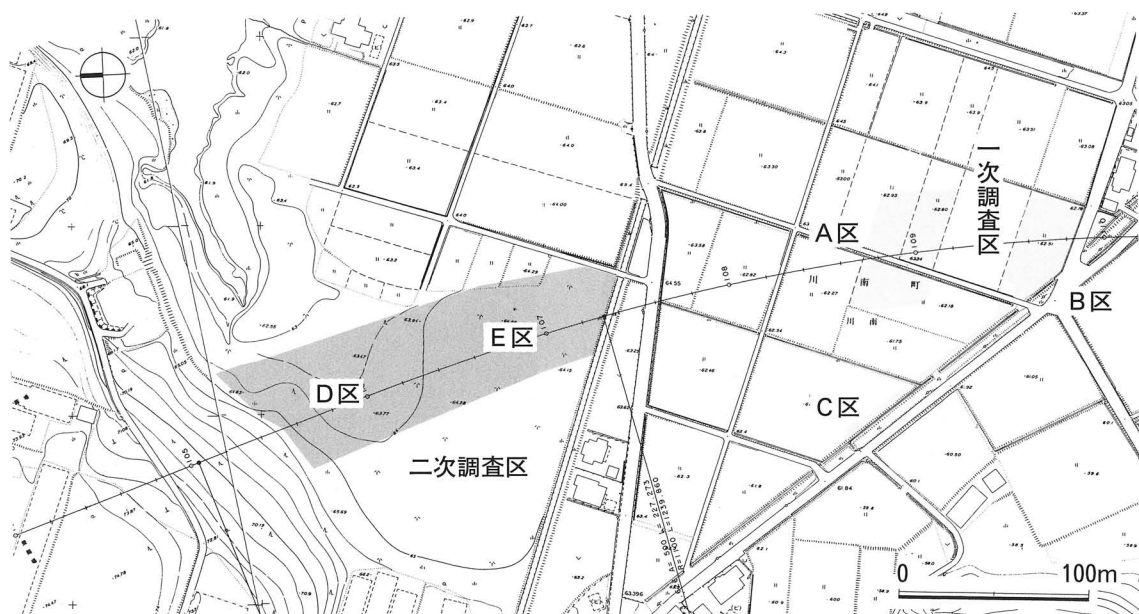


図10 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

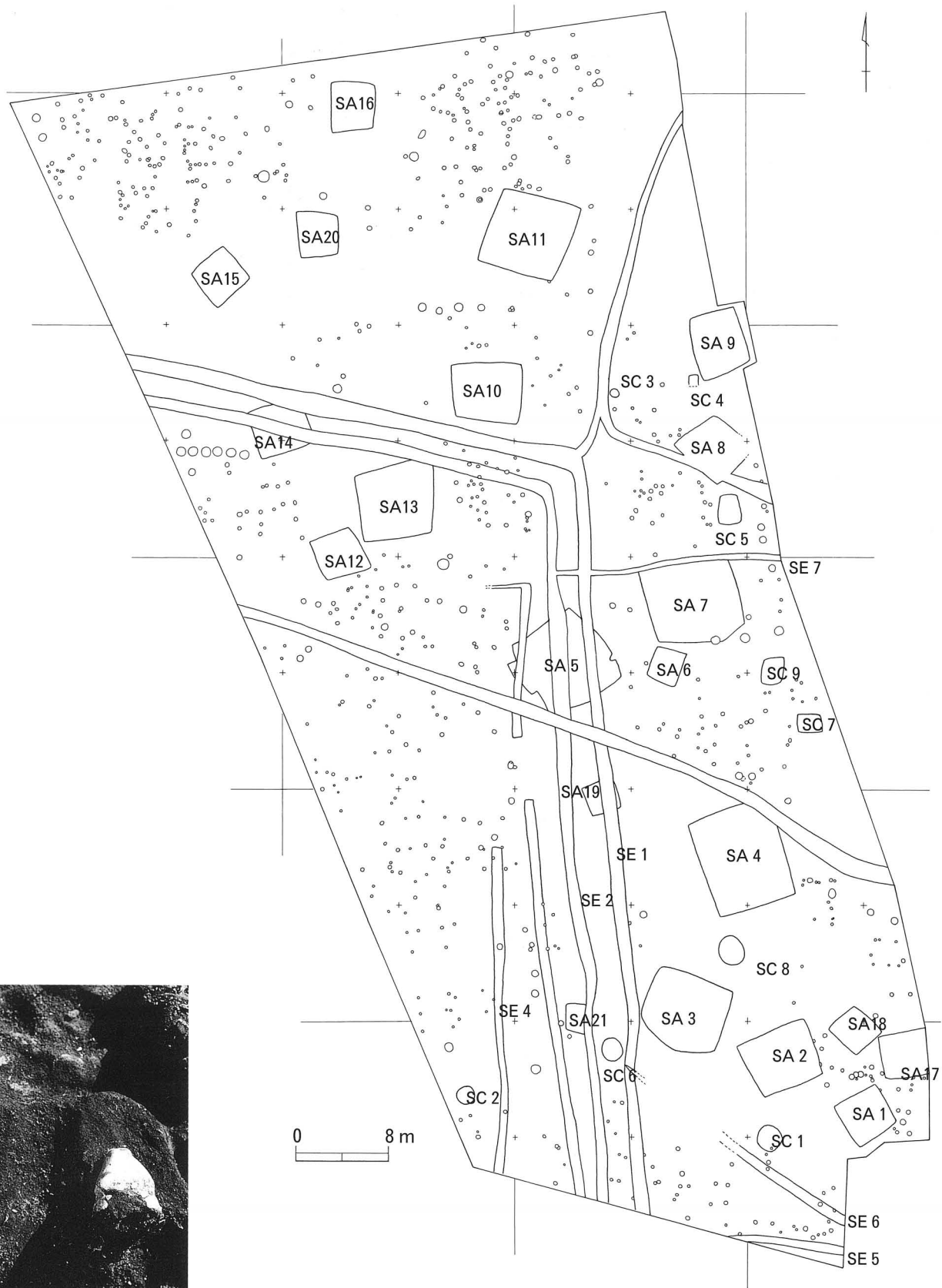


図11 E区 遺構の分布(1/500)

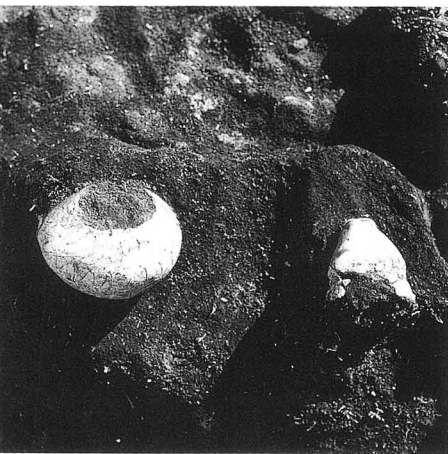


写真20 SA6 遺物出土状況

## ②中世

土坑3基（SC4・7・9）、溝状遺構8条（SE1～SE8）を確認した。また小穴群の埋土中から土師器杯・皿が出土しており、中世の掘立柱建物の柱穴であった可能性が考えられる。

SC4は1辺が1m弱の方形の土坑で、土師器皿2枚と短刀が出土した。

SC7は1辺が3m弱の方形の土坑で、6本の柱穴を確認した。粘土塊や糸切りの土師器皿が出土した。

SE1～4は南から北へ延び、SE1・2は調査区中央付近で西に直角に近い角度で屈曲し、SE3・4は途中で消滅している。

SE1は、多量の礫及び遺物が確認され、他のものと様相が異なる。

## (3) 小 結

本遺跡では、主に弥生時代後期～古墳時代初頭と中世の遺構・遺物が確認された。

竪穴住居については、調査区全体に分布しており出土遺物から時期差があると考えられる。

溝状遺構については、SE1・2が直角に近い角度で屈曲することなどから、区画を意図してつくられたものである可能性がある。



写真21 SA2炭化材検出状況



写真22 SA1

## 46 のくび 野首第1遺跡

### (1) 遺跡の立地

小丸川の右岸、丘陵が複雑に入り組みつつ展開する青木段丘裾の開析谷に位置する。調査区は北東に向かって下る谷の大部分を含むが、斜面のほぼ全面にわたって段違い状に平場が認められる。標高は20～30mを測り、調査区内での高低差が大きい。

北西側に県道改良工事に伴う野首第1遺跡が隣接し、両遺跡にまたがるように野首古墳群（2基確認）が存在している（図12）。

### (2) 調査の概要

調査区をA～C区に分割し、現在はA区縄文時代早期包含層とB区低湿地層の調査を行っている。

A・B区は礫層を基盤とし、Kr-Kb～クロボクが堆積しているが、場所によって層序・層厚が異なり、不安定な状況を呈する。特に縄文時代早期包含層は最大180cmと厚く、台地上から谷部への流れ込みに

よる二次堆積と考えられる。またB区からC区の一部にかけて自然流路が形成されており、低湿地層の堆積がみられる。

#### ①縄文時代

主として縄文時代早期・前期・後期の土器が出土しているが、早期の押型文系土器・貝殻文円筒形土器が多数を占める。石器は石鏃・石斧・磨石・敲石などの他に、異形石器や十字形石器なども見られた。これらの遺物は包含層中に散乱した状態で出土しているため、ほとんどが台地上からの流れ込みと推測される。

早期に属する遺構としては、集石遺構を30基以上検出した（図12、写真24・25）。A区ではK-Ah層より約40～50cm下に多量の礫を擁する散礫が広がっており、それらを除去したところで集石遺構を検出した。一方、B区においては散礫が見られず、K-Ah層より約10cm下で集石遺構が検出された。

集石遺構は規模の大小に加えて、掘り込み・配石の有無など構造上の差異が認められ、A区では配石を持つものと持たないものとが共に見られるのに対



写真23 遺跡全景(南より)

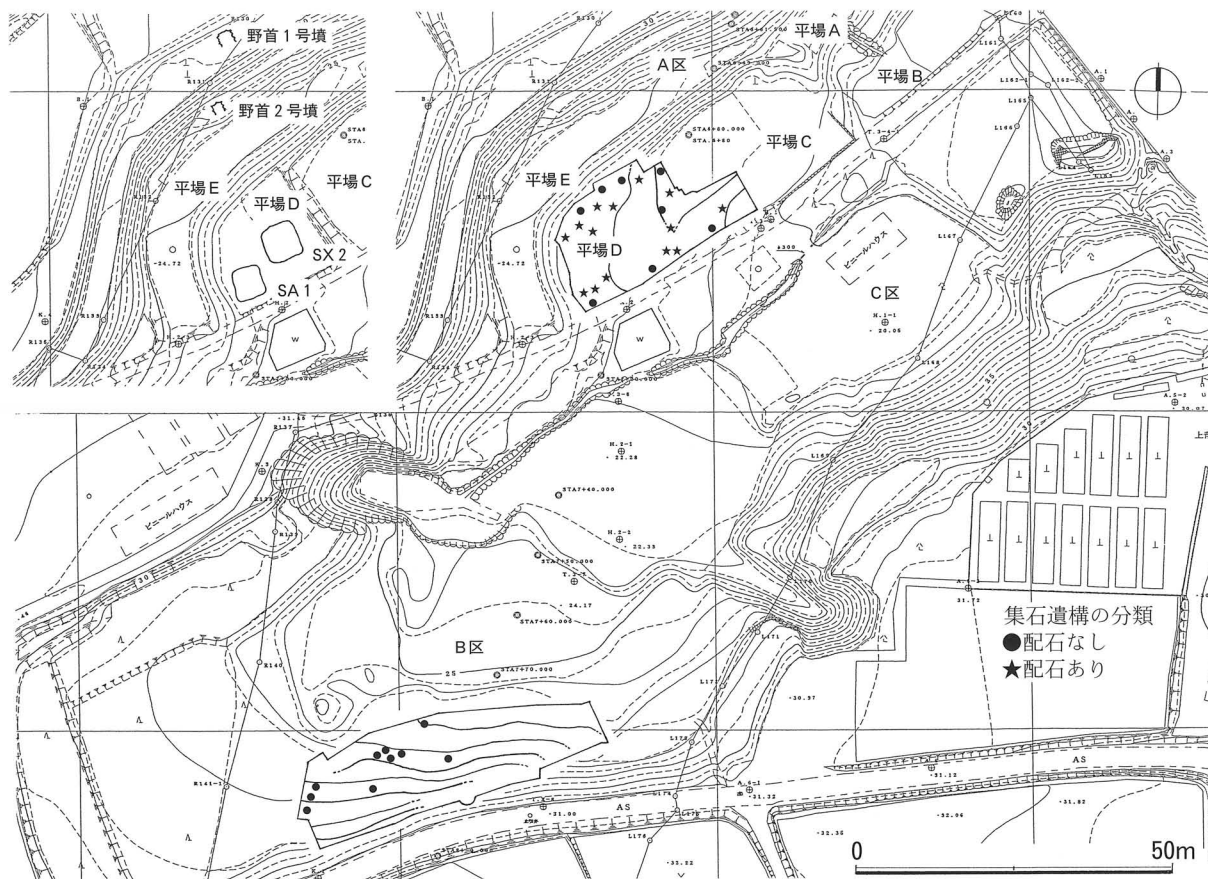


図12 縄文時代・古墳時代遺構分布図(S = 1/1,200)



写真24 A区集石遺構(1)



写真25 A区集石遺構(2)

し、B区では配石を伴うものが確認できなかった。またA区では深い掘り込みを持つものが多く、B区の集石は浅い掘り込みないし掘り込みを持たないものがほとんどであった。これは機能差や時期差を反映している可能性がある。隣接する野首第2遺跡においても、配石・掘り込みの有無を含め、様々なパターンを持つ集石遺構が多数確認されており、両遺跡を総合した検討を行う必要がある。

押型文系土器が出土した集石遺構が数例あり、関係を窺わせるが、遺物が出土する集石遺構の数は少なく、その位置づけを困難にしている。

### ②古墳時代後期～終末期

A区で竪穴状遺構1基(SX2)が新たに検出された。5.9×5.9mの隅丸方形プランで昨年度調査の竪穴住居跡(SA1)より大きい。主軸方向はほとんど同じである。後世の削平を逃れ比較的良好に

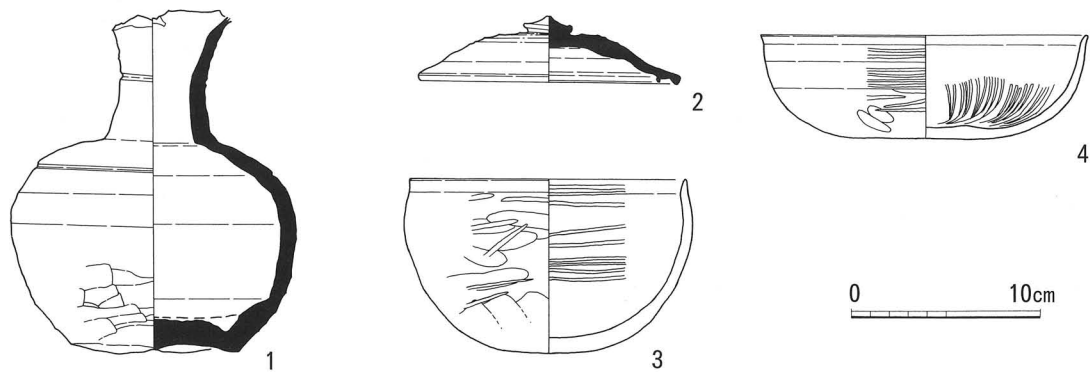


図13 竪穴状遺構(SX2)出土遺物(S=1/4)

残存しており、埋土中からは須恵器長頸壺(1)・須恵器杯蓋(2)・赤彩された土師器碗(3)・暗文を有する土師器杯(4)などが出土した。

また埋土中に焼土の混入する小穴が、貼床面より上位の層中で8箇所検出された。さらに埋土と遺物出土の状況からも、埋土中にも遺物集中面が存在し、埋没の過程においても何らかの目的で使用された可能性が考えられる(巻頭図版6・写真26)。

床面中央部に土器埋設炉(甕を使用)が1基検出されたが、明確な柱穴は確認できず、上述の遺物出土状況・埋没過程と合わせて考えると、一般的な住居とは性格が異なる可能性がある。

1は口縁部が全て失われており、また胴部への打撃によって破碎されたかのような状態で出土している。法量は胴部最大径15.1cm、底径8.8cm、残存高18.2cmを測り、体部外面下半には不定方向のヘラケズリが施されている。

2の杯蓋は口径13.6cm・器高3.5cmを測る。かえりは短く、口縁端部より下には突出しない。頂部に扁平な擬宝珠形のつまみを有し、外面は全体の1/3程度まで回転ヘラケズリ調整を行う。

3は口径14.4cm・器高9.2cmを測り、口径に比して深い器形を呈する。体部外面は不定方向のケズリ・ミガキ、内面には丹念なミガキを施している。また内外面ともに赤彩されている。

4は口径16.9cm、器高4.9cmで、口縁部はやや外反し、端部内面は面取りされる。内面は底～体部にミガキ、口縁部にナデが施されている。



写真26 竪穴状遺構(SX2)遺物出土状況

さらに体部には左上がりの放射状暗文が、底部には螺旋状暗文が部分的に確認できる。暗文の幅は0.5~1.0mmを測り、やや太めである。外面は全体的に風化が激しいが、部分的に不定方向のケズリ・ミガキが見られ、口縁外面はナデを施す。内外面ともに赤彩されている。

これらの出土遺物のうち、2は杯Bの範疇で捉えられるものであり、かえりの形態などからTK46型式並行期に属する可能性がある。

よってSA1・SX2は野首1号・2号墳とともに、6世紀後半~7世紀中頃を中心に時期を重ねつつ営まれたと考えられ、遺構相互の関連性について検討する必要がある。

また野首2号墳の西側にあたる平場Eでは、土師器片の散在する箇所が検出されており、土師器甕・甌などがみられる。その付近では白色粘土塊が検出されており、野首第2遺跡で確認されているものと類似しているが、性格については検討を要する。



写真27 B区低湿地調査状況



写真28 SC61

### ③中世

B区の谷底部分では、地下水位が高く低湿地層が最大1.0mの厚さをもって良好に残存しており、木製品の破片が出土した(写真27)。

加工痕がみられる程度の破片がほとんどだが、なかには柄杓や曲物、扇など性格・用途の推定できるものもある。ほかにマツ・モモ(?)などの種子も確認されている。

周囲からは土師器皿(ヘラ切りの底部を有するものが多い)・白磁片(口禿・切り高台)・青磁碗・青花皿などが出土しており、それらの年代観から14～16世紀代の遺物であると考えられる。

### ④近世

A区平場Eで確認された土坑(SC61)は、平面規模3.1×2.4m、確認面からの深さ0.9mの立方体を呈し、四周の壁面・床面に焼土混じりの赤色土が約15cmの厚みで塗られている。内部には多量の礫が詰まっていたが、礫の隙間には土が入らず、礫が流入した後に埋没したと考えられる(写真28)。

埋土中から出土した遺物は、ほとんどが近世後半の陶磁器で、床面直上からは肥前系磁器・薩摩系陶器などのほかに多量の動物骨(ウマ・イヌ・イノシシなど)が確認された。

こうした状況からSC61は廃棄坑として使用されたと推測されるが、壁面に塗られた赤色土などを考慮すると、当初の機能は異なる可能性もあり検討を要する。また壁面の北東・南東隅には、赤色土を掘り込む形で柱穴状に拡張された窪みが確認でき、ある時点では上屋が存在した可能性も考えられる。

### (3)小結

B区北半の低湿地層を残し、A・B両区の調査をほぼ終了した。これから検討すべき部分が多いものの、今年度の調査では以下の内容を明らかにすることができた。

層序については、開析谷を形成するB区からその小支谷にあたるA区にかけての、Kr-Kb～クロボク層の堆積状況が把握できた。B区では南の台地上(野首第2遺跡方面)から、A区では北西の台地上(県道改良工事に伴う野首第1遺跡方面)から、Kr-Kb層以上の土壌がそれぞれの谷部を辿りつつ二次的に堆積していった可能性が大きく、各時代の遺物・遺構を検討する際にも考慮すべきと考えられる。

縄文時代早期では、様々な構造的特徴を有する集石を検出した。特に配石の有無・掘り込みの深さにおいて、A区とB区で異なる様相を看取できた。その要因として時期差や機能差などが想定できるが、上述したように隣接遺跡の集石遺構も含めた詳細な検討が必要である。

古墳時代では竪穴状遺構(SX2)を検出した。その性格的な位置付けについては、遺物や出土状況などの特異な様相や、野首1・2号墳を見上げる立地条件などを考えると慎重にならざるを得ない。加えて、下耳切第3遺跡・牛牧古墳群や山王古墳群を含めた地域の中での解釈も今後の課題となろう。

また、低湿地の調査は今年における大きな成果の一つであり、木製品片などが出土した。

近世では、廃棄坑としての使用が想定される土坑を検出した。これまで検出した土坑も含め、屋敷地の空間利用を考える上で重要な要素になるだろう。



## 47 のくび 野首第2遺跡

### (1) 遺跡の立地

本遺跡は、北東から南東に向かって流れる小丸川を望む標高約30mの舌状台地上に立地する。南西側の背後には、丘陵地が迫っており、その丘陵地から舌状台地の北側斜面（野首第1遺跡近接）と南側斜面に沿う2方向の湧水が流れている。南東斜面下に広がる山王古墳群及び小丸川河口（蚊口浜）～日向灘が遠望できる（写真29）。

### (2) 調査の概要

平成13年度からの継続調査中で、平成14年度までにA区の調査を終了して、現在はB区とC区（平成14年度からの継続調査）の調査を行っている。B区もC区同様に耕作土直下の遺物包含層から、縄文時代後期～晩期、古墳時代中期、古代～近世の異なる時代の諸遺物が数多く混在して出土している。なお、本遺跡の基本層序の中にK-Ahの堆積がほとんど観察されないことが、縄文時代後期の竪穴住居の集

落や古墳時代中期の竪穴住居の集落形成に関する様相把握に困難を呈しているが、今後の調査やテフラ分析によって解明されていくものと考えられる。

平成14年度までにA区では、主に後期旧石器時代に属する7枚の文化層、縄文時代早期の集石遺構及び炉穴をそれぞれ百数十基、後期中半の溝状遺構1条及び竪穴住居跡1軒、古墳時代中期の竪穴住居跡11軒、その他土坑、多数の小穴が確認された。

現在調査中のB区では、縄文時代早期の集石遺構12基、縄文時代後期終末～晩期前半の竪穴住居跡2軒、同時期の土坑群、古墳時代中期の竪穴住居跡10軒、波板状凹凸面を伴う道路状遺構の続きの一部、多数の小穴群及びA区で検出された縄文時代後期中葉の溝状遺構の続きが一部確認された。

同じくC区では、縄文時代早期の集石遺構14基、縄文時代後期終末～晩期前半の竪穴住居跡29軒、古墳時代中期の竪穴住居17軒、古代及び中世以降の掘立柱建物4棟、波板状凹凸面を伴う道路状遺構、土坑や多数の小穴群などが確認されているが、土壌堆積状況から検出に苦慮する遺構も存在するため、炉穴等は今後も増加する可能性が極めて高い。



写真29 遺跡全景(南東斜面下の山王古墳群及び小丸川河口～日向灘を望む)

表土	
I層〈黒褐色土層〉	縄文時代後期～晩期
火山灰層(K-Ah: 境界アカホヤ)	古墳時代中期
二次堆積 ※C区南西端 にごくわずかに残存	平安時代の遺物包含層
II層	
〈黒色土層=MB0〉 無遺物層	
△△△△△	縄文時代早期遺物包含層
III層〈暗褐色土層=ML1上部〉	
IVa層〈明褐色土層=ML1下部〉	後期旧石器時代第VII期 (細石刃石器群)
▲▲▲▲▲	後期旧石器時代第VI期 (ナイフ形石器群5)
IVb層〈火山灰層=Kr-Kb: 小林錢石〉	後期旧石器時代第V期 (ナイフ形石器群4)
▲▲▲▲▲	後期旧石器時代第IV期 (ナイフ形石器群3)
V層〈暗褐色土層=MB1〉	
▲▲▲▲▲	後期旧石器時代第III期 (ナイフ形石器群2)
VI層〈火山灰層=AT〉	
無遺物層	
▲▲▲▲▲	後期旧石器時代第II期 (ナイフ形石器群1)
VII層上部〈白斑混黒褐色土層=MB2+ A-Fm・A-0t: 始良深溝・始良大塚〉	後期旧石器時代第I期 (隕塊石器群)
▲▲▲▲▲	
VII層中部～下部〈暗褐色土層=MB3〉	
▲▲▲▲▲	
VIII層〈明褐色土層=ML3+Kr-Aw: 霧 島アワオコシ+ML4〉	※▲▲▲▲▲: 礫群の検出 △△△△△: 隕石・散塊の検出
IX層〈明褐色土層= Kr-lw: 霧島アワオコシ〉	
無遺物層	
X層〈黄白色土層= ML5+A-lw: 始良岩戸〉	
無遺物層	
以下、礫層	

現代

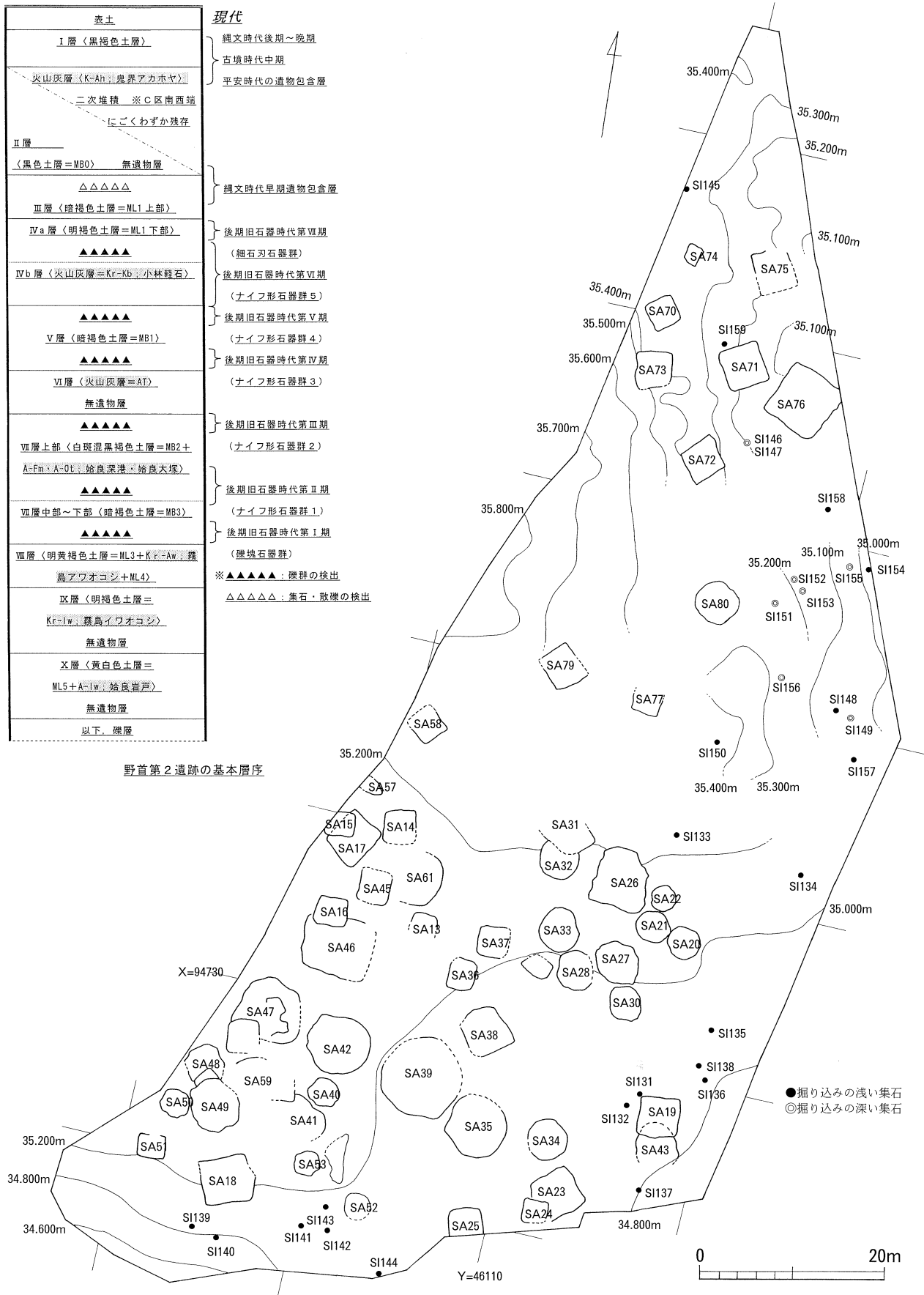


図14 基本層序とB・C地区遺構分布図(1/600)

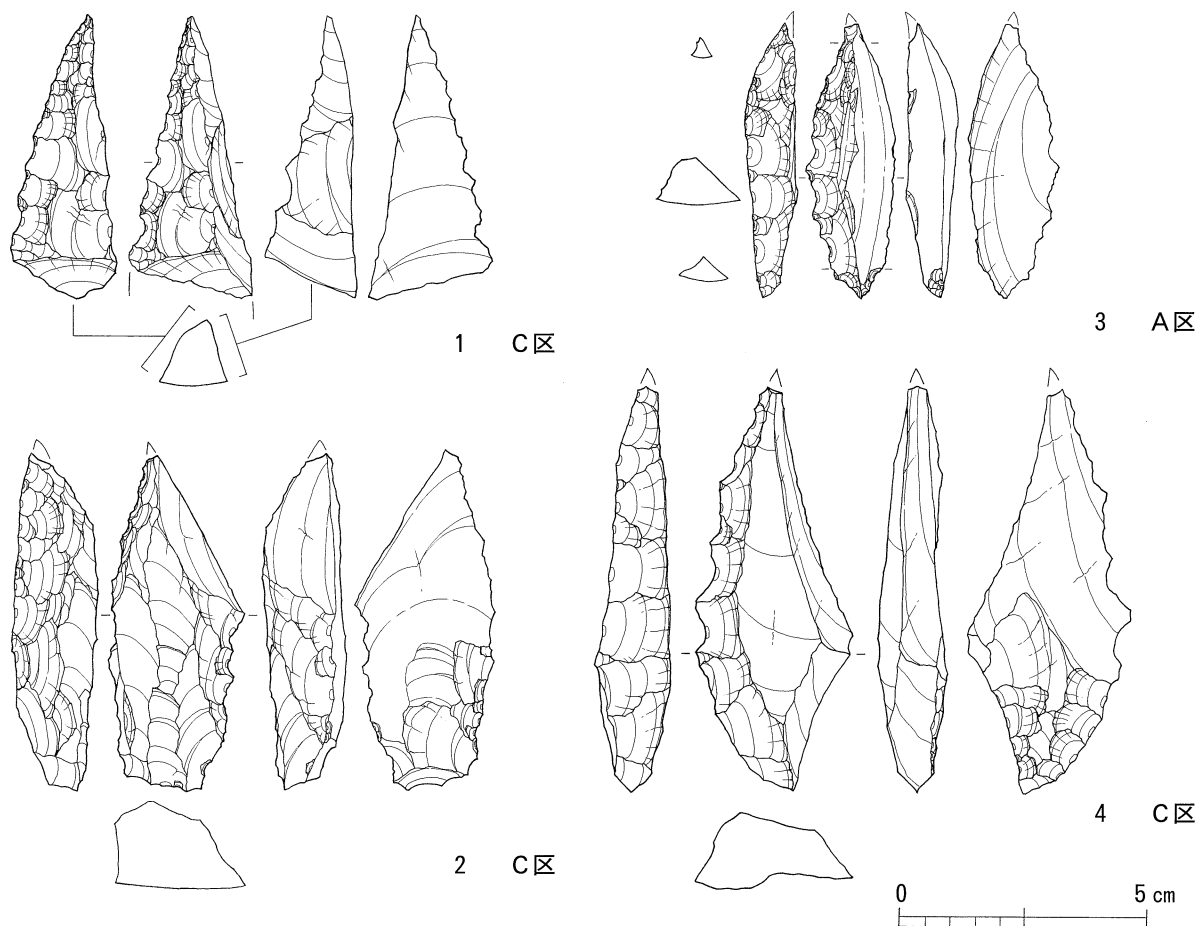


図15 後期旧石器時代(A T上位)の石器(2/3)

① 後期旧石器時代

後期旧石器時代の遺物・遺構は全調査区で確認された。A区では、複数時期にわたる後期旧石器時代の遺物包含層が層位的大別では7枚確認され、多数の礫群が検出された。古いものより順に第Ⅰ期(MB3下部の礫塊石器群)、第Ⅱ期(MB2下部のナイフ形石器群1)、第Ⅲ期(MB2上部のナイフ形石器群2)、第Ⅳ期(MB1下部のナイフ形石器群3)、第Ⅴ期(MB1上部のナイフ形石器群4)、第Ⅵ期(Kr-Kbのナイフ形石器群5)、第Ⅶ期(ML1下部の細石刃石器群)に時期的細分ができた。特にAT降灰前後の包含層においては、環状に分布していることがわかっている。B・C区において、包含層の下限を確認する目的で、先行して深掘りした範囲のML1下部(第Ⅶ期)で細石刃+礫群、Kr-Kb(第Ⅵ期)で、終末期の基部加工ナイフ形石器、(第Ⅵ期)~MB1上部(第Ⅴ期)で国府型のナイフ形石器や角錐状石器、AT直上(第Ⅳ期)で剥片

・石核+礫群、MB2上部(第Ⅲ期)及びMB3上部(第Ⅱ期)において、ホルンフェルスを用いた剥片・石核などの石器群が出土している。今後も調査進行に伴って遺物・遺構の検出が期待される。

② 縄文時代早期

B・C区において確認された集石遺構には、深さ70cmを超える土坑を伴うものが数基近接して検出された(巻頭図版3、写真30・31)。集石は土坑の有無や規模、構成礫の密度、配石の有無などの様相から、A区同様に形態分類が可能である。深い集石遺構の配石近くからは、比較的残りのよい炭化物(長径約20cm)が数点出土している。集石遺構の分布は、B・C区の縁辺部に集中し、隣接して検出されている炉穴との関係については、A区と比較すると切り合い関係が認められないため、炭化物のAMS年代測定結果が待たれるところである。

B区の集石内の遺物はA区同様に押型文系土器であるが、C区の集石遺構・炉穴周辺の遺物は貝殻文

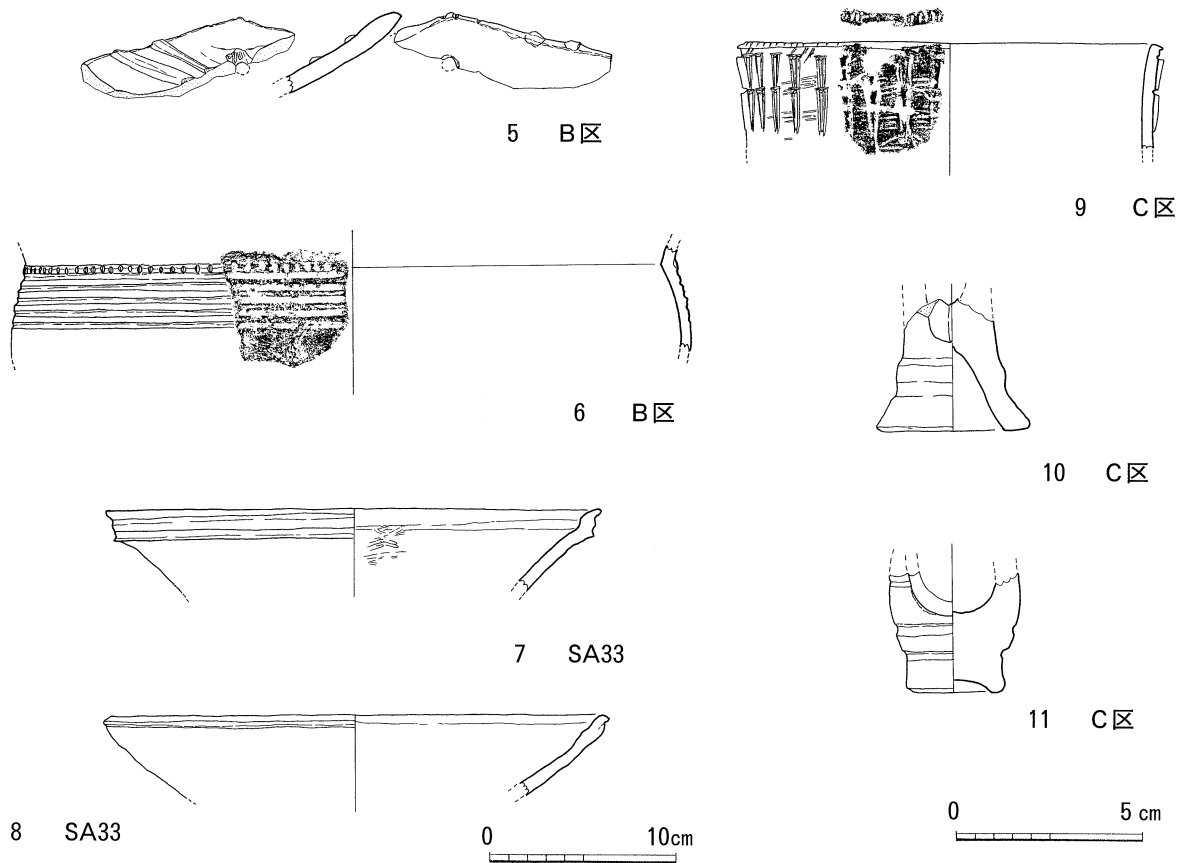


図16 縄文時代後～晩期の土器(5～9=1/4、10・11=1/2)

系土器であり、押型文系土器は出土しておらず、両調査区の様相差に留意する必要がある。B区の炉穴はA区ほど群をなさず、単独のものが多く明瞭な焼土を含むものが多い。B・C区の炉穴は今後の調査により増加する可能性が極めて高いと推測される。

### ③ 縄文時代後期・晩期

B・C区における顕著な遺物として、A区同様に打製・磨製石斧、打欠礫石錘、磨石・敲石などの大量出土が注目される。さらに石斧製作に伴う可能性のある剥片・碎片類も多く出土している。他にC区のS A33などから出土した丸玉などの数点の翡翠製品が特筆される。また、A区では一定量認められた晩期の遺物（無刻目突帯文土器、孔列文土器、組織痕土器）などの出土がB・C区では少なく、A区における後期の遺物として検出されなかった土器片錘がB・C区では包含層中及び土坑などの遺構から出土していることなどの差がある。

竪穴住居跡群は、C区の北端中央付近から南東～南西端付近へ弧を描くような範囲に集中し、一部B

区に広がるが、ほとんどはC区内に分布している。竪穴住居間の切り合い関係はほとんど見られず、隣接する住居どうしの距離は10数cmという事例が多い（巻頭図版5）。平面形は、円形プラン（23軒）であり、一部小型の隅丸方形プラン（5軒）を含んでいる。大きさは、おおまかに小型・中型・大型の3つに分類できる。小型住居は、支柱穴が不規則であり、中型住居では、2本柱を持つものがあるが、柱穴跡が明瞭でないため柱の構造は、今後の調査で追究していく課題として残る。屋内炉は、石組み施設ではなく、ほぼ中央付近に地床炉と思われる痕跡を残すものが多い。竪穴住居の壁面の立ち上がりは、明瞭な上端と下端を有する住居跡がある一方、住居の床面と壁面とが緩やかに皿状の掘り込みとなる住居跡がほとんどである。皿状の掘り込みは、小型住居よりも大型住居の方が深い様相を見せている。なお、住居内の埋土や床面での遺物量は、古墳の竪穴住居内と比べて少なく、B・C区ともに遺構外の包含層からの出土が圧倒的に多い。

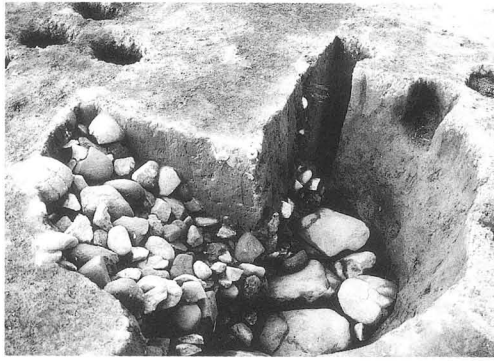


写真30 S I 156 半截状況

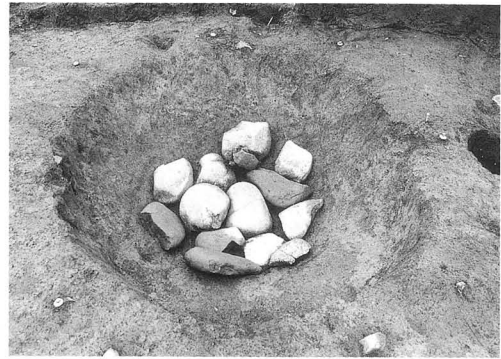


写真31 S I 153 配石



写真32 S A 38 遺物出土状況



写真33 S A 76 遺物出土状況

#### ④ 古墳時代中期

古墳時代中期の遺構として、全調査区で竪穴住居38軒が検出された。調査区の竪穴住居は、時期的には中期に属し、平面形は、方形で一辺の長さから大型(約6~7m)、中型(約5m)、小型(約4m以下)に分けられる。竪穴住居は隣接し、切り合い関係はほとんど見られない点が特徴的である。ほとんどの住居は、貼床が施されており、貼床を除去すると、住居の補修と思われる床面もA区において検出された。壁溝は、A区において数軒見られたが、B・C区では、ほとんど見られない。火処は、地床炉跡と思われる焼土が検出され、ほとんどの住居にて見られた。竪穴住居内からは、タタキ目のある甕や壺、高坏等の遺物が数多く出土している(写真32・33)。なお、A区S A 7からは5世紀末(T K 47併行期)の須恵器坏や、B区の2軒の竪穴住居床面から滑石製の白玉も十数点出土した。

#### ⑤ 古代・中世

遺構はC区に見られた硬化土壌を埋土とする小穴が連続的に配された波板状の道路状遺構が見られていたが、B区においてもその延長線上で検出された。

B・C区を北東→南西方向に走っているが、地形の削平等によって、B区の途中で消滅している。遺物はC区において緑釉陶器、古代以降の土師器、布目瓦片、管状土錘が見られていたが、B区の南端にも出土が確認された。C区北端に検出された古代以降と思われる掘立柱建物との関連が重要視される。

#### (3) 小 結

全調査区を通じてK-Ahの堆積が見られず、縄文時代後期や古墳時代中期における竪穴住居の集落形成の上で追求すべき大きな課題として残っている。K-Ahは、いくつかの遺構中の埋土から検出されており、今後の遺物整理作業や自然科学分析の進展とともに、時代背景や旧地形の浸食・削平などの自然的・人為的作用が解明されてくると期待できる。

調査が継続中であり、未だ不明な点が多いが、通時的な傾向として、A・B・C区間における空間利用形態の違いが見られ、野首第1遺跡などの近隣遺跡との比較検討を含めて、今後の調査成果に期待したい。

(1) 遺跡の立地

唐木戸第1遺跡は、高鍋町の西部に広がる牛牧台地の中央部（標高約83~80m）付近に位置し、丘陵から派生した扇状地の端部付近に立地する。調査区は、昨年度実施した調査区の北東にある。調査区付近の地形は、中央がゆるやかな丘陵鞍部をなし、そこから東西にゆるやかに傾斜する。

(2) 調査の概要

畑地の造成に伴う削平や盛り土がなされていたため、中央部でML1（IV層）上面まで、西側がK-Ah（II層）上面まで、東側がMB0（III層）中位までの削平を受けていた。今次調査では、K-Ah（II層）上面からMB1まで実施し、旧石器時代、縄文時代早期及び中世の遺構と遺物を確認した。

①後期旧石器時代

Va層（Kr-Kbをわずかに含む褐色ローム）~VI層（暗褐色ローム）で遺物が出土しており、特に、

Vb層（Kr-Kbを密に含む褐色ローム）にピークがある。主な遺物として、剥片、石核、スクレイパー、ナイフ形石器などがあげられる。また、調査区北東部では、石器ブロック1箇所を確認した。この石器ブロックでは2個体の石器間接合を確認した。

Va・VI層は、ともに遺物の出土状態は疎である。Va層では、細石刃、細石刃核、剥片、石核等が、一方、VI層では調査区西側の一部で、製品（ナイフ形石器、角錐状石器）や剥片が出土している。

②縄文時代早期

遺構は、集石遺構2基、土坑は8基検出された。特に、土坑に関しては、陥し穴と推定できる遺構7基が確認された。陥し穴は一次調査でも3基検出されており、今次調査の7基を含めて総計10基の検出となる。これらの陥し穴は丘陵の最高所を中心として、陥し穴の主軸方向が南と西では等高線に平行に、東側は直交するあり方を示している。

遺物は、調査区北西部で、貝殻条痕文を中心とした縄文時代早期中葉~後葉の土器出土集中箇所を検出した。反対側の北東部付近においては、塞ノ神式土器が1点出土した。また石器は石鏃、スクレイパー、

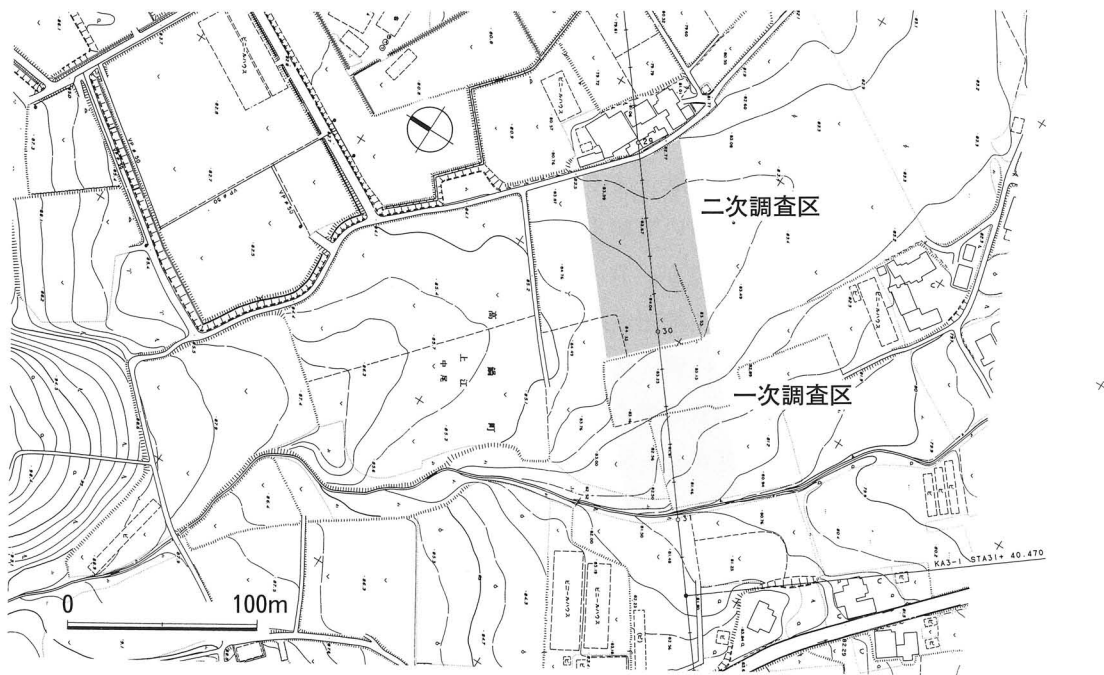


図17 遺跡の周辺地形と調査区(1/4,000)

剥片などが調査区の東側を中心に出土している。

### ③ K-Ah降灰以降

K-Ah上面で、掘立柱建物4棟と不明土坑1基、溝1条を検出した。SB1の柱穴より、中世の土器片(小皿片)が、SB2の柱穴底面より中世の須恵器(片口鉢)が出土したが、SB3、SB4からは遺物は出土していない。調査区中央から東側では、溝1条(SE2)、道路状遺構1条(SG1)を検出した。

### (3) 小 結

本遺跡の旧石器時代については、石器ブロックが1箇所確認されたものの、総して石器の出土状況は極めて疎である。

縄文時代早期については陥し穴7基、集石遺構2基が検出された。遺物は包含層や土器集中箇所より、早期中葉～後葉の貝殻条痕文土器と塞ノ神式土器が得られたが、前述の遺構の時期を特定するまでは至っていない。陥し穴については、昨年度の調査成果を総合すると、丘陵を東流する開析谷の両斜面に列状に配置されたあり方が認められた。このことから、小河川に面した狩猟の場という空間が存在したことが推定できよう。

K-Ah降灰以降の遺構に関しては、中世に属する掘立柱建物と溝、道路状遺構等があげられる。これらは、谷を挟んで隣接する唐木戸第2遺跡の様相と近似している。

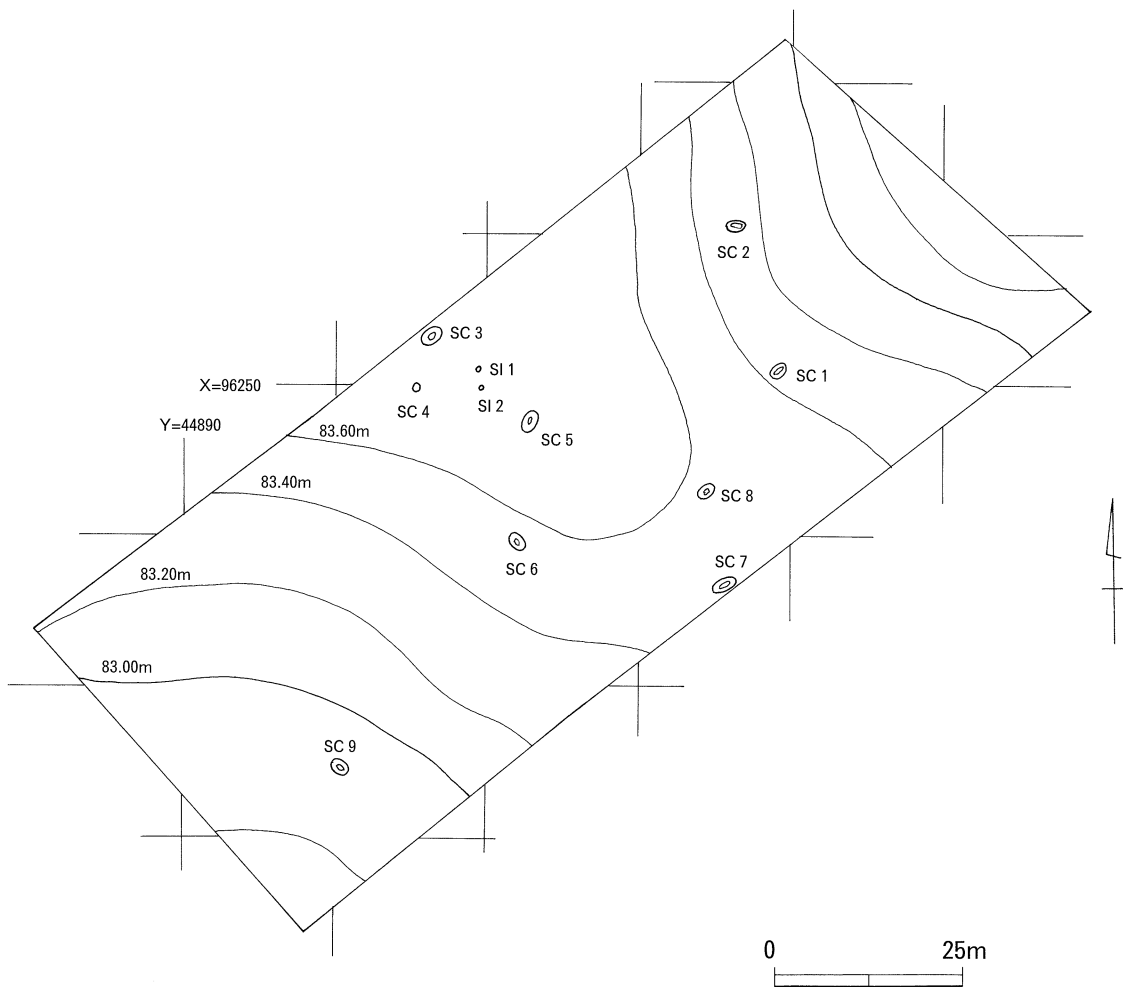


図18 IV層 遺構の分布(1/100)

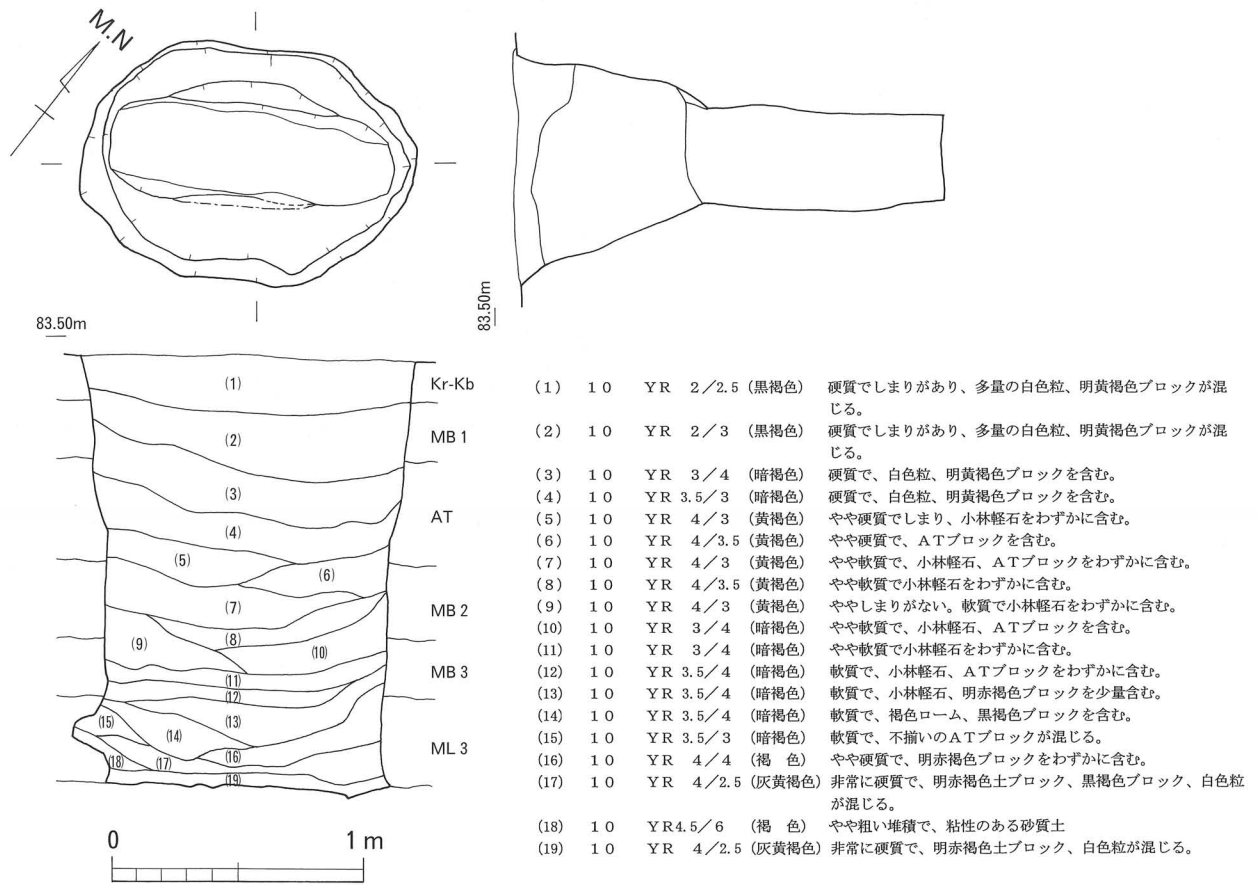


図19 SC1土層断面図(1/40)

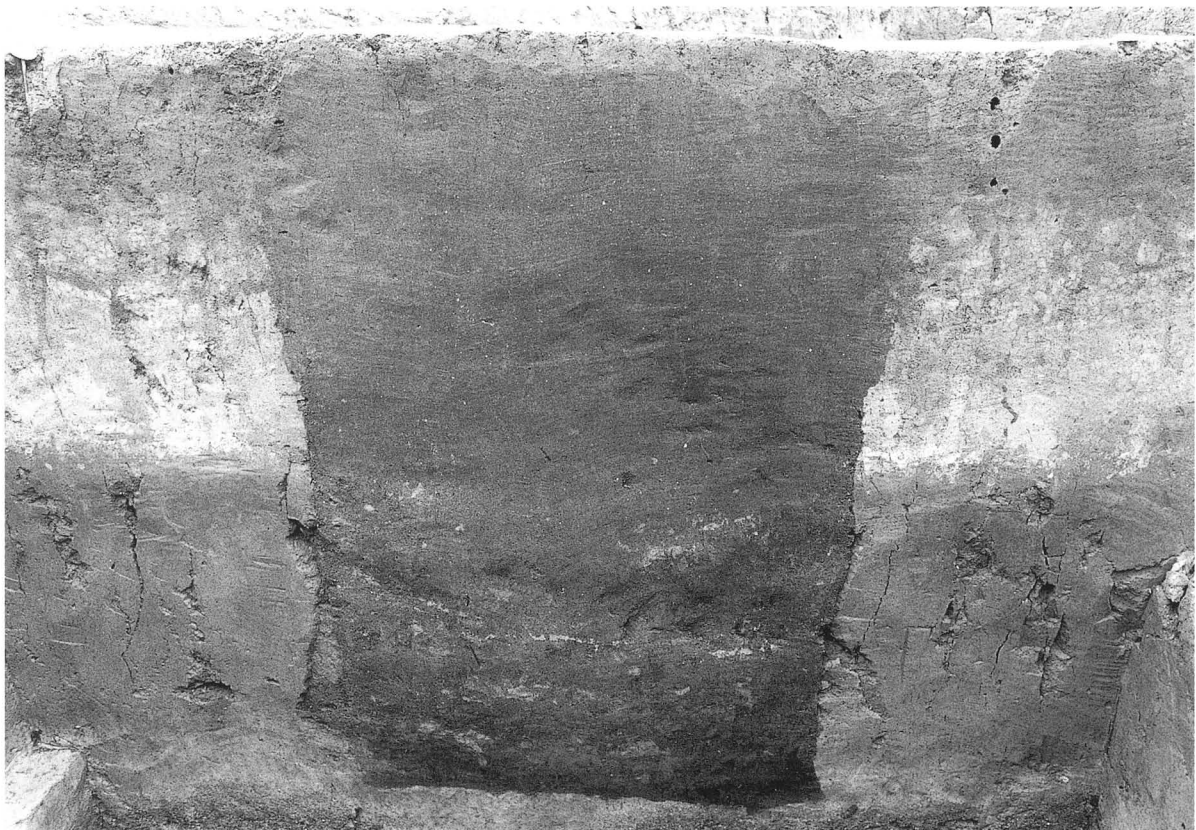


写真34 SC1 半截状況



### (1) 遺跡の立地

高鍋町南西部にあり、三財原台地の西方に立地する。標高は約92m。西方約70mのところから茶臼原台地の段丘崖が迫っている。

### (2) 調査の概要

四次調査においては、平成14年度より調査区を北側調査区と南側調査区の2区に分け、北側調査区から調査を開始し、北側調査区終了後に南側調査区の調査に入った。平成14年度の調査では、調査区全体についてKr-Kb(VI層)の調査まで終了している。

今年度の調査においては、後期旧石器時代の遺物を包含するMB1(VII層)とML2(VIIIa層)が調査対象となった。

#### ①後期旧石器時代(ML2)

調査区南西部において、礫群が8基検出された。

これらの礫群は、ほぼ直線上に並ぶように集中して検出された。礫のほとんどは赤化しており、最大長10cm以上の大形の割れた礫を密に配している。また、礫の組み方が二段組みになっている点特徴的である。調査区南東部では、搔器7点をともなった最大長10cm以上の完形の礫約20個から成る礫群が1基(SI23)検出された。南西部礫群と南東部礫群との中間部では、2箇所の石器ブロックが検出された。ここでは、ナイフ形石器や多数の剥片・碎片、石核、敲石等が出土した。

#### ②後期旧石器時代(MB1)

調査区全体で礫群が13基検出された。構成礫は、赤化礫を含む小礫が多く散漫に広がっており、礫数も10~100程度と様々であった。礫群の他に、11箇所の石器ブロックが検出された。ここでは、多数の剥片や碎片、石核が出土し、ナイフ形石器や角錐状石器等の製品の多くは、石器ブロックの縁辺部で出土している。また、5箇所の石器ブロックは礫群とともに検出された。

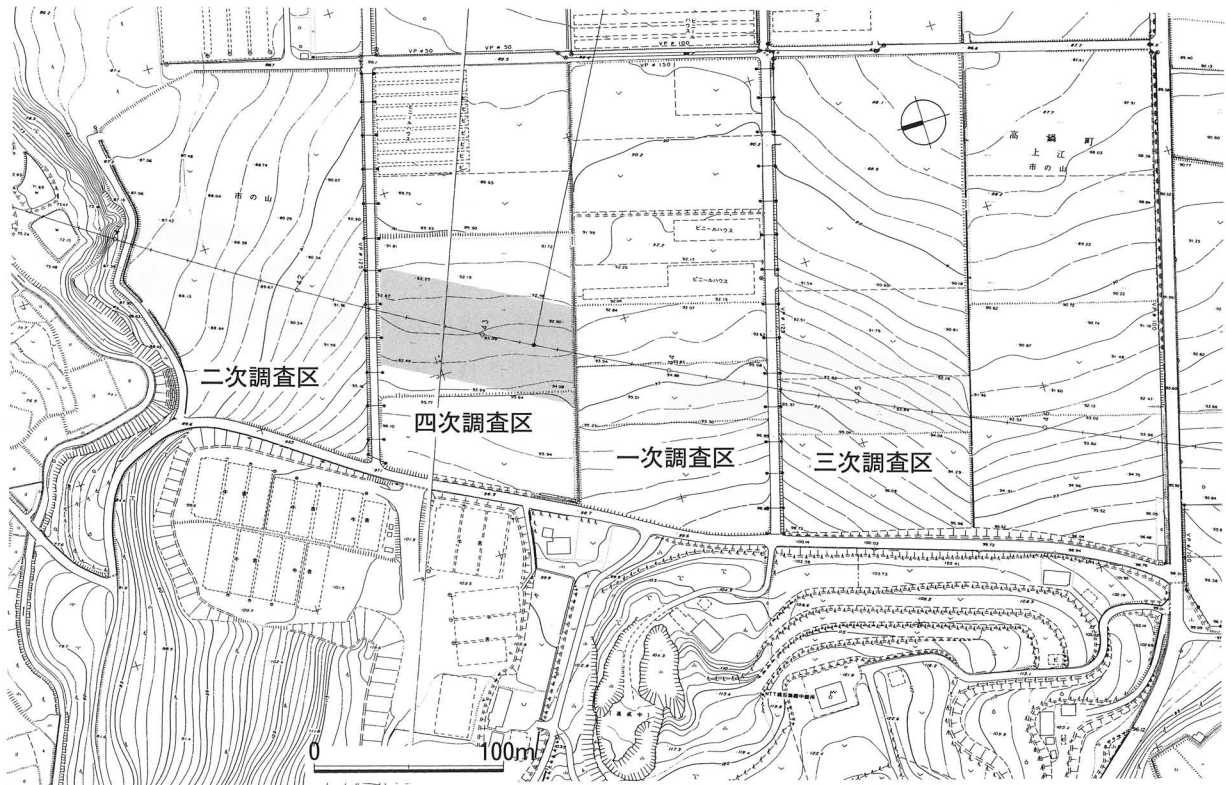


図20 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

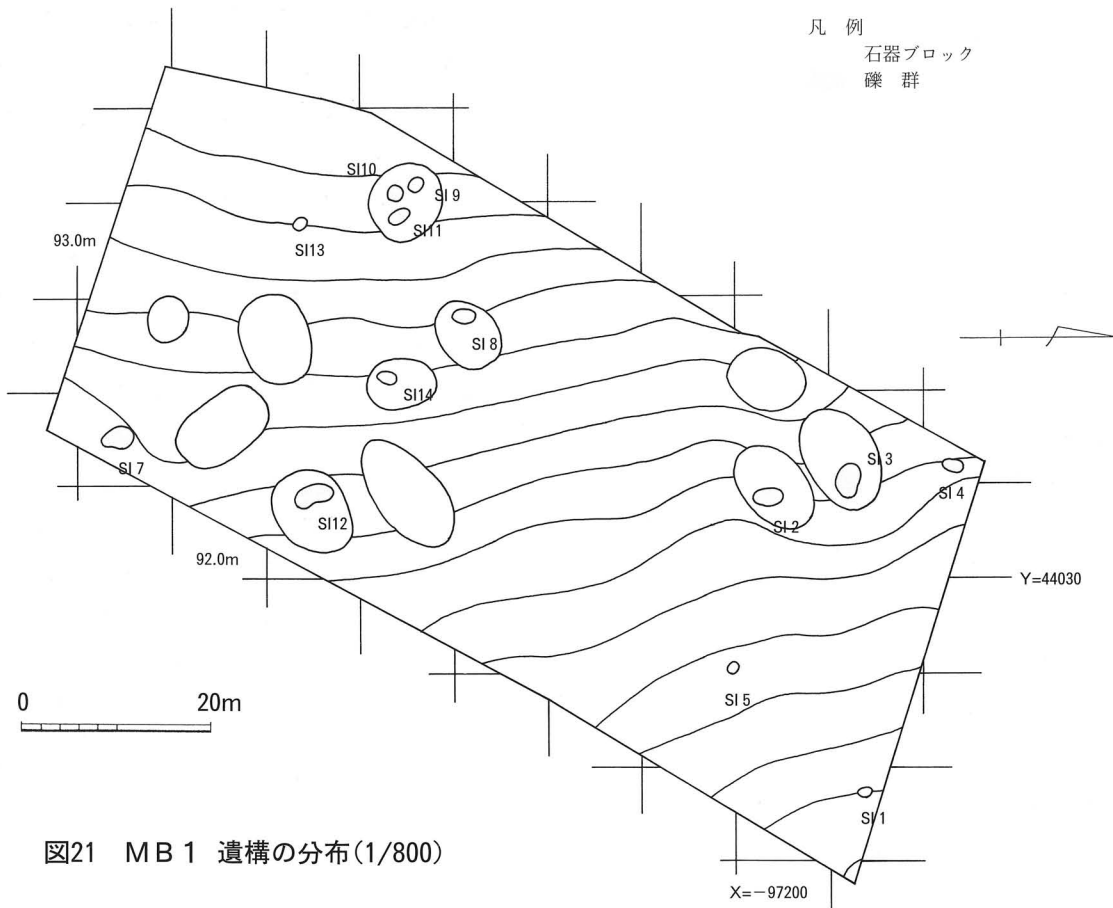


図21 MB 1 遺構の分布(1/800)

写真35 (上) MB 1 礫群  
写真36 (下) MB 1 石器ブロックと礫群



### (3) 小 結

ML 2、MB 1で確認された礫群及び石器群の分布状況を考えるとそれぞれの使用状況の違いが推測される。

ML 2においては、調査区南西部で集中して検出された礫群は、火処として使用された場所であり、南東部で検出された礫群は、皮鞣し等の作業台として利用された礫の集まりであったと推測される。

また、3箇所の石器ブロックについては、石器製作のための場所であり、これら3つの空間がそれぞれの機能を果たしながら生活が営まれていた空間配置がなされていたものと推測される。

これに対して、MB 1の場合、石器群に伴う礫群が多く比較的一定の場所で諸作業を行ったのではないかと推測される。

このような検出状況の違いから、当時の生活形態の一端をうかがい知ることができる。今後、各層での遺物及び礫の接合状況等が明らかになるにつれ、更に空間利用形態の違いも浮かび上がるであろう。

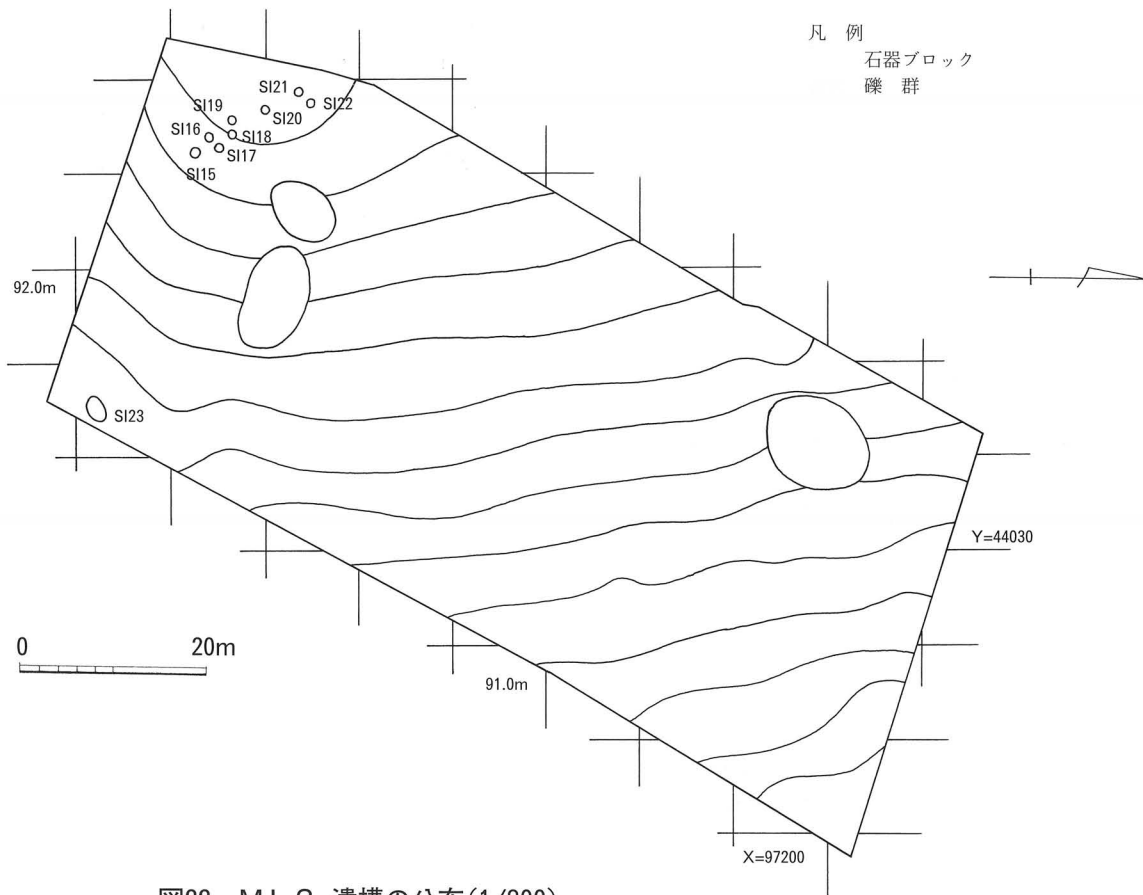


図22 ML 2 遺構の分布(1/800)

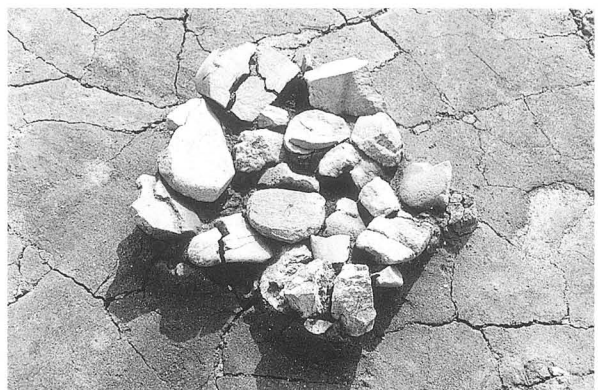


写真37 (上) ML 2 遺物・礫出土状況  
写真38 (下) ML 2 石器ブロック

写真39 (上) MB 1 石器ブロックと礫群  
写真40 (下) MB 1 礫群

ひがしうねわら  
64 東畦原第1遺跡(四次)

(1) 遺跡の立地

三財原段丘面上の緩やかな傾斜地に立地する。標高は約91mで、南西に向かって緩やかに下り、東側には谷が迫っている。

(2) 調査の概要

調査は、表土を除去後、K-Ah(Ⅱ層)上面で遺構検出を行った。その後、MB0(Ⅲ層)~Kr-Kb(Ⅴ層)まで掘り下げ、縄文時代早期・草創期から後期旧石器時代の調査を実施した。今後、MB3(XⅠ層)まで調査を継続する。

①後期旧石器時代

Kr-Kb(Ⅴ層)では、土坑3基(うち2基は焼土を伴う)、小穴4基が確認された。遺物は、角錐状石器・ナイフ形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核・石核・剥片・碎片等が出土した。なお、このV

層上面で石鏃が5点出土している。

②縄文時代草創期

遺構は、ML1(Ⅳ層)で、赤化礫(片)を主体とする集石遺構1基が検出されが、掘り込みや配石は確認されなかった。遺物は土器片・石鏃・敲石・台石・剥片等が出土した。北東部には石鏃や黒曜石・ホルンフェルス・サヌカイトの剥片・碎片から構成される石器ブロックが3箇所検出された。

③縄文時代早期

MB0(Ⅲ層)では、調査区北側を中心に比較的小形で赤化した礫・礫片が広範囲にわたって出土した。礫はいくつかの密集区を構成しており、その中に平椀式土器片・石鏃・敲石・台石・剥片等の遺物を伴っていた。層位や出土土器片の編年から縄文時代早期後葉のものと思われる。さらに、東側の緩斜面ではチャート製石鏃・剥片・碎片からなる石器ブロックが1箇所検出され、そのすぐ南では、集石遺構(配石、掘り込みを伴わない)が1基確認された。

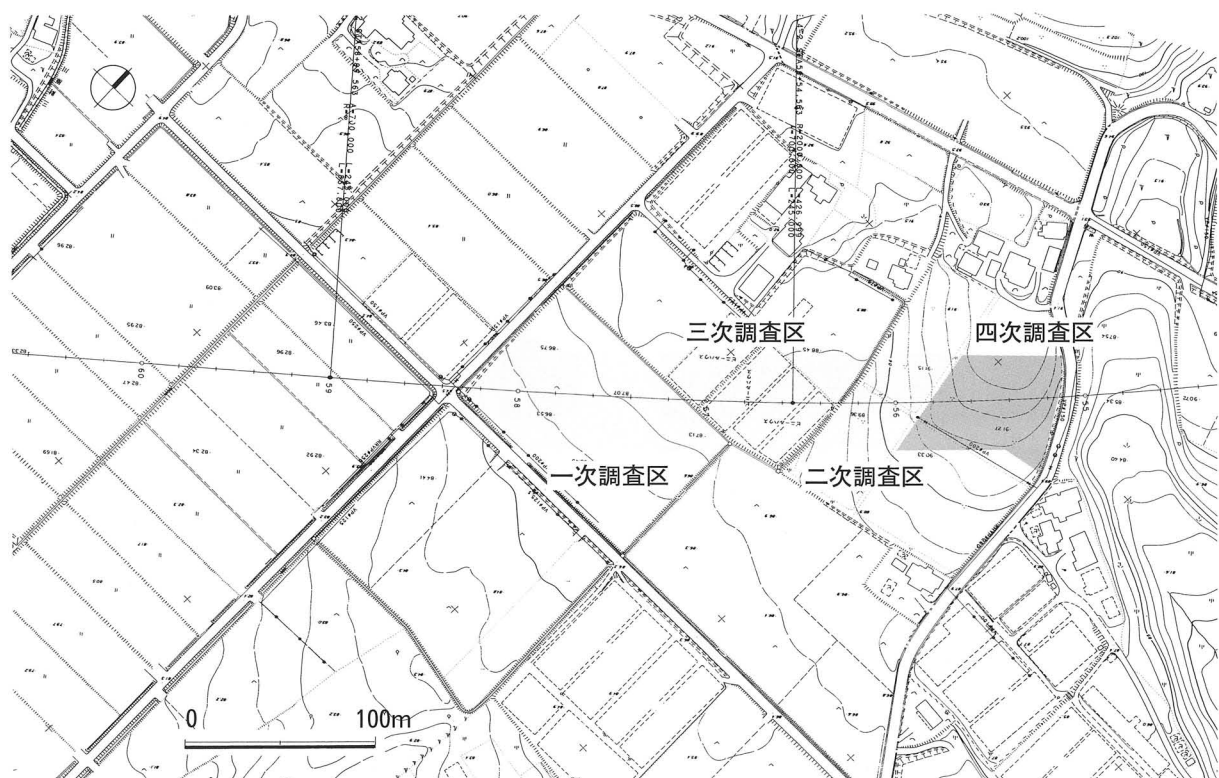


図23 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

#### ④時期不明の遺構

K-Ah（Ⅱ層）上面で道路状遺構が1条検出された。削平によりごく浅く残っているだけで埋土中から遺物は出土せず、時期等は不明である。

#### （3）小 結

本遺跡では、縄文時代草創期から早期にかけて、石鏃等を含む黒曜石やチャート・サヌカイトなどの剥片・碎片を多く伴う石器ブロックの存在を特徴としてあげることができる。石器ブロック内から二次

加工剥片や石核、敲石や台石とみられる遺物も多数出土していることから、石器製作の場であった可能性が高い。

道路状遺構については、隣接する音明寺第1遺跡でも本遺跡と同じK-Ah面で南西から北東に延びる道が検出されており、その関連を明らかにしていきたい。

後期旧石器時代に関しては、現在、Kr-Kb（Ⅴ層）の掘り下げ、精査を行っているところである。



写真41 MB0 遺物・礫出土状況



写真42 Kr-Kb面の状況



写真43 K-Ah上面検出 道路状遺構

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、一ツ瀬川の左岸に広がる三財原台地上にある。調査区は三財原段丘面（標高約86m）に立地し、北東方向に緩やかに傾斜している。

なお、本遺跡位置は図1では、町道の西側になっているが、今回の三次調査は、町道東側の昨年度調査した西畦原第1遺跡（二次調査）のK-Ah以下層を調査対象にしている。そのため、今回の調査区の位置は、図上ではNo.67の地点にあたる。

(2) 調査の概要

調査区は丘陵縁辺部の北東に舌状に張り出す緩傾斜面にあたる。本遺跡は前年度、K-Ah上面までの調査が既に終了しており、本調査では、MB0（IV層）・Kr-Kb（VI層）・MB1（VII層）及びAT層以下のMB2・MB3（IXa・IXb層）の調査を行った。

①後期旧石器時代

MB3相当層（IXb層）では調査区北東部（約20m×35mの範囲に広がる散礫）と南西部（礫群2基）

中心に散礫が確認された。遺物は、敲石、礫器、剥片が出土している。

MB2相当層（IXa層）では、MB3と同様に調査区の北東部（東西方向に約30m、南北方向に約15m程度の範囲に広がる散礫）と西部（礫群1基）を中心に礫の散布が確認された。遺物は、ナイフ形石器、磨石、敲石、台石、剥片、チップ等が出土している。

Kr-Kbを中心とする層では、礫群が3基確認された。遺物は、ナイフ形石器、スクレイパー、石斧、敲石、磨石、台石、剥片、石核等が出土している。

②縄文時代早期

MB0（IV層）では、縄文時代早期の土器片や石鏃、剥片等が出土した。また、本遺跡の北東部や北西部を中心に集石遺構6基（SI1～SI6）、A区中央部とB区(北部)北東部から陥し穴3基（SC1・2・5）、A区中央部より焼土を伴う土坑が2基（SC3・4）、B区（北部）から土坑（SC6・7・8）が検出された。

集石遺構は、北東部の3基が十数cm程度の比較的大きな礫から構成されるのに対して、北西部の2基は10cm未満の小礫で構成されていた。いずれも床面の掘り込みなどは確認できなかった。



図24 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

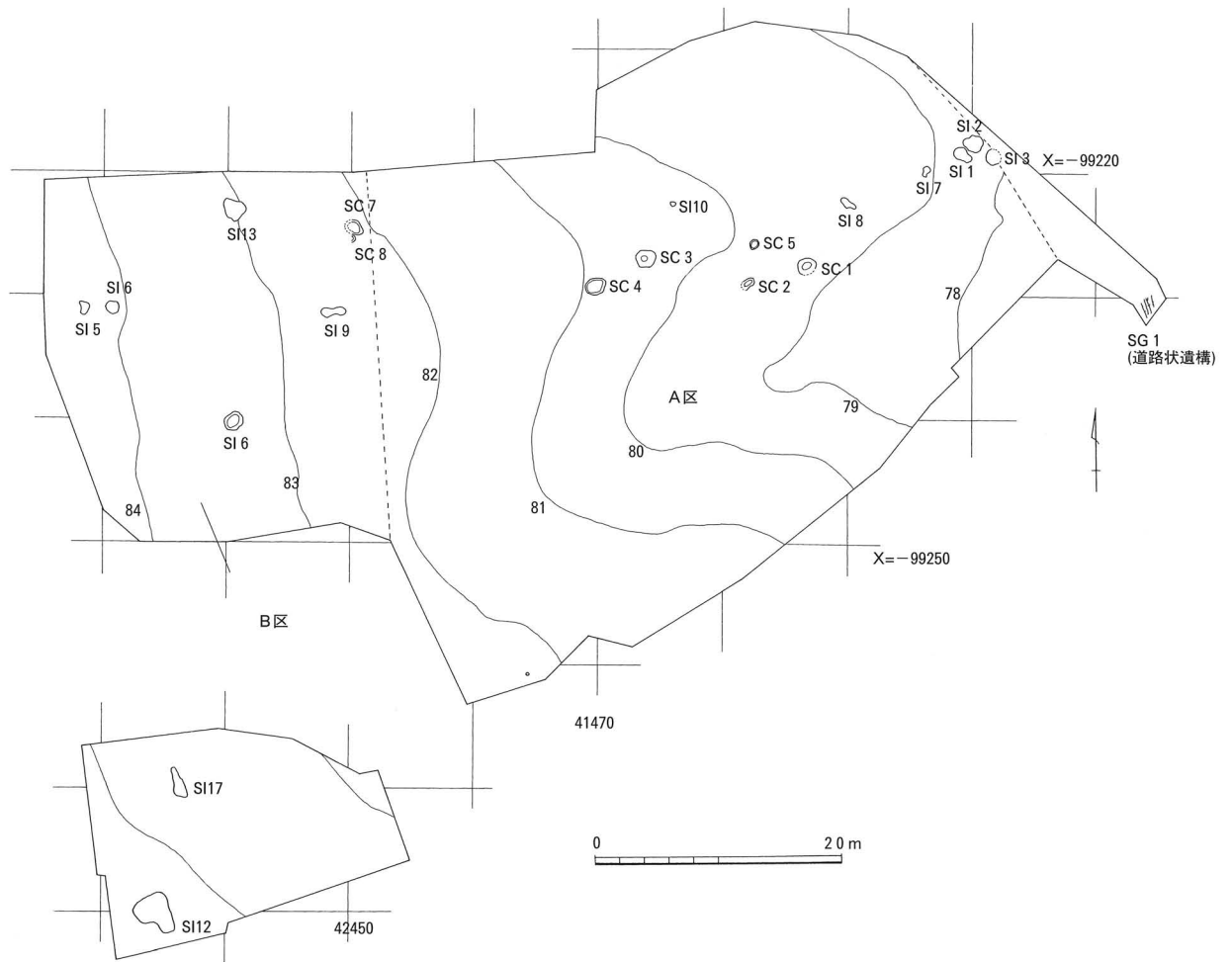


図25 遺構の分布(1/600)



写真44 A区 MB 2・3 礫群

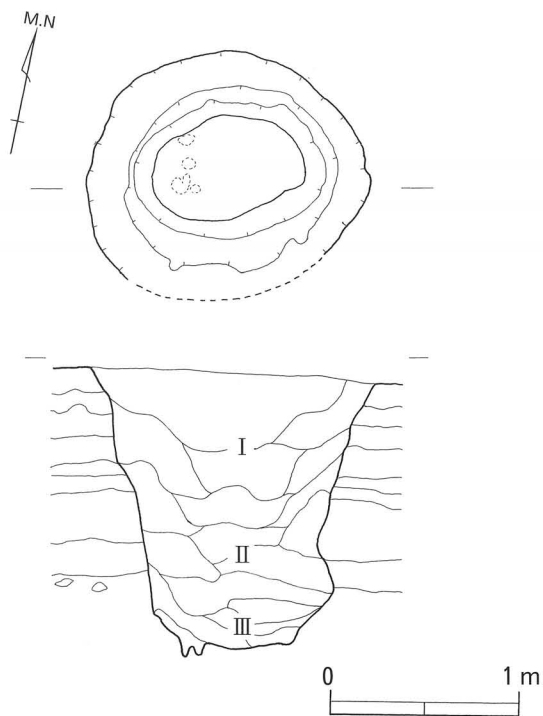


写真45 B区 MB 1 礫群(SI 9)

陥し穴の3基のうち2基は土層確認のトレンチの掘り下げにより存在が確認できたものである。

SC1・2・5は近接しており、それぞれの位置から3～4m前後に分布する。SC1は平面長径1.5m、深さ1.6m、SC2は長径1.0m、深さ1.4m、SC5は長径0.8m、深さ0.7m、長径の向きは等高線に対して並行傾向にあり、谷部が近いことも影響があると考えられる。SC1とSC5の底部には道具痕や杭痕が確認できた。

焼土を伴う土坑は、概ね長径1.7m、深さ0.3m、土坑中の底部から西側にかけて焼土を確認することができた。土坑SC6は長径1.7m、深さ0.9mで比較的大形である。またSC7は長径1.5m、深さ0.3m程度で、穴の形状・規模から使用目的についての手がかりを得ることはできなかった。



- I 褐色の埋土で弱粘質。Kr-Kbを多く含み、硬くしまっている。
- II 褐色（一部は、にぶい黄褐色）の埋土で、弱粘質。下層は水の作用によるものか白んで見え、粘質である。全体的にATを多く含む。上層から中層にかけてはしまりがなく、部分的にMB2やMB3、Kr-Awのブロックを含む。
- III 褐色～にぶい黄褐色（一部はオリーブ褐色）の埋土で粘質。しまりがなく、水分を多量に含む。下場壁面は極めて粘性がある。

図26 SC1 (1/40)

### (3) 小 結

AT下位のMB2・MB3の礫群は比較的大きめの完形の円礫や亜円礫で構成され、礫の密集度は散漫であった。またAT上位のKr-Kh～MB1の礫群はやや小さめの礫で構成されていた。舌状台地の緩斜面は人の営みが断続的に行われたと思われる。

また、MB0（IV層）からV層にかけての集石遺構はA区では主に東端に、B区では西端に位置していた。特にB区は土器片、剥片が集石遺構の周辺で出土しており、縄文時代早期には一時的な人間の営みが行われたといえよう。他の空間については、陥し穴や石鏃といった遺構・遺物から、食料獲得に関する場所であったと推察される。

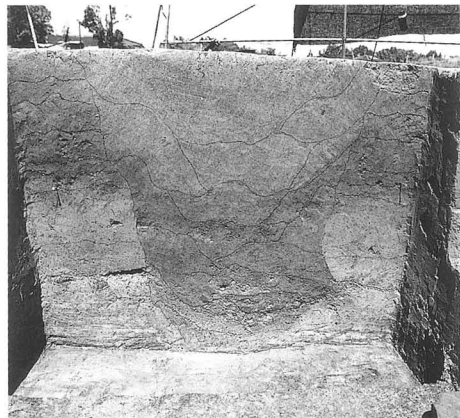


写真46 SC1 半截状況



写真47 SC2 完掘状況



### (1) 遺跡の立地

三財原台地の西端、鬼付女川に流れる支流に浸食された台地上に位置する。標高は72～79mで、北側から南側に向かって傾斜している。

調査区は大幅に削平されており、原地形は改変されている。南側に伸びる谷の先端部分はその影響を免れている。

### (2) 調査の概要

確認調査の結果をもとに調査地の絞り込みを行い、A区～D区の調査区を設定した。

調査では、Kr-Kb (VI層) とMB 2・3 (IX層) が対象となった。ただし、MB 2とMB 3の識別は困難であったので、同一の層としている。

### ①後期旧石器時代

A区とB区でKr-Kb (VI層) から、スクレイパーやナイフ形石器、石核などが出土した。またML 2 (VII層) で礫群が2基検出された。

A区では、AT直下のMB 2・3 (IX層) の上層から小型のナイフ形石器などが出土した。MB 2・3 (IX層) から大型の礫を中心とする礫群が1箇所検出された。礫群は、MB 2・3の上層と下層から検出され、上層の礫群は炭化物も同時に確認された。礫はほとんどが砂岩で赤化しているものが多い。遺物としては台石や敲石、磨石、スクレイパー、剥片、石核などが出土している。

### ②縄文時代

A区では、Kr-Kb面で、集石遺構2基と焼土を有する明確な炉穴6基が検出された。集石遺構は、耕作による削平などでほとんどの礫が失われていたが、下部は残存していた。また配石が確認され、完形の大型の礫を使用している。

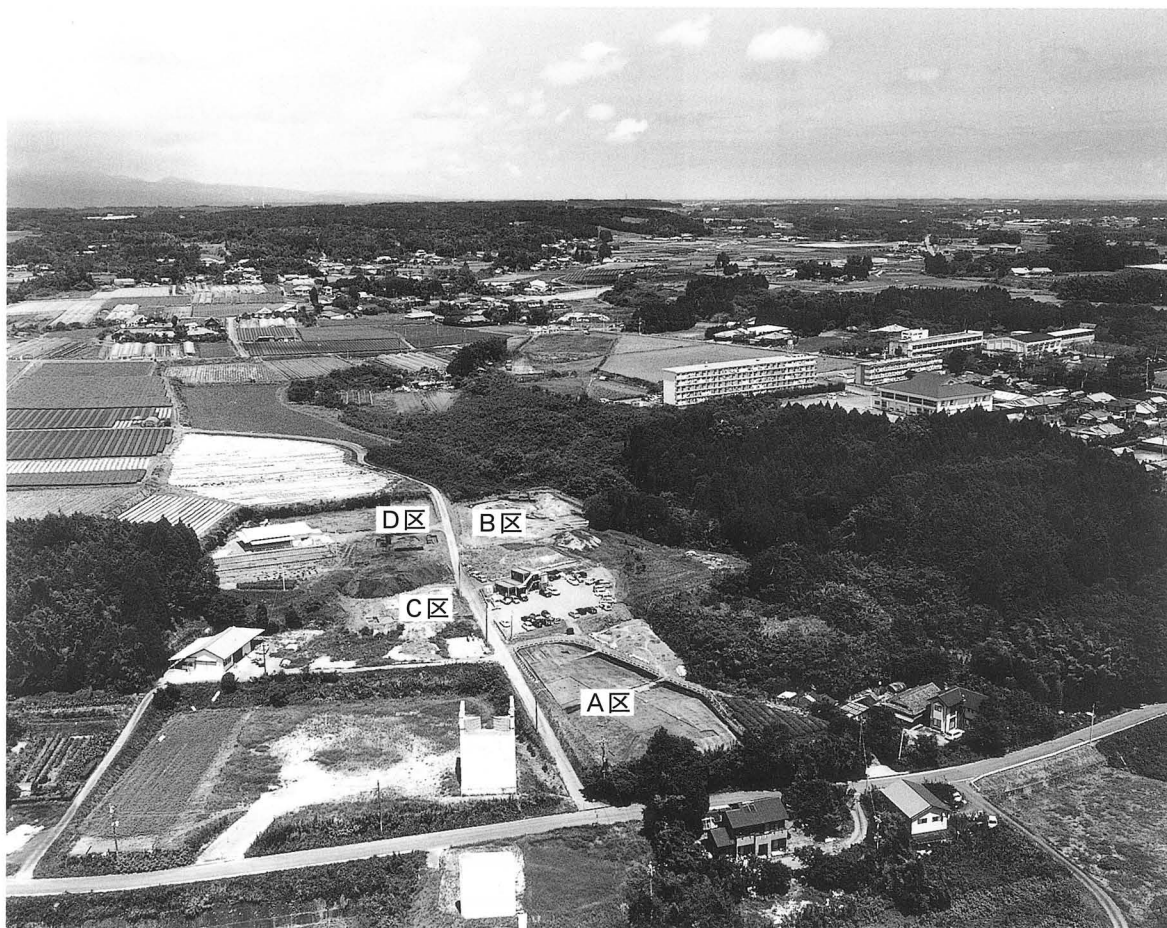


写真48 遺跡全景(南より)

炉穴は、ほとんど削平されており、炉穴の底部が残存している状況であった。

B区では、傾斜地で集石遺構が2基検出された。

C区では、陥し穴が1基検出され、D区では、集石遺構が1基検出された。

遺物はB区で客土中から押型文土器が出土している。

### (3) 小 結

調査区は畑の造成などで大部分が削平を受けており、Kr-Kb (VI層) が部分的に残存している箇所を中心に調査を行った。特に南側の舌状に伸びる台地 (A区) では、旧石器時代、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。旧石器時代の遺構では、

AT (VIII層) の上層のML 2 (VII層) と、下層のMB 2・3 (IX層) から礫群が検出された。

遺物は、Kr-Kb (VI層) から石核・剥片などが、AT直下のMB 2・3 (IX層) の上層から小型のナイフ形石器を含む石器が出土している。このことから、ATを境に2つの文化層の存在が考えられる。また南端部分でML 3 (X層) から礫群が検出されており、さらに文化層が増える可能性がある。

石器はスクレイパーやナイフ形石器、剥片、石核などがほとんどであり、礫群とともに出土している箇所もあり、調査地の性格を判断するうえでの資料となる。

今後の遺物の整理状況で、遺跡の性格が明らかになっていくものと思われる。

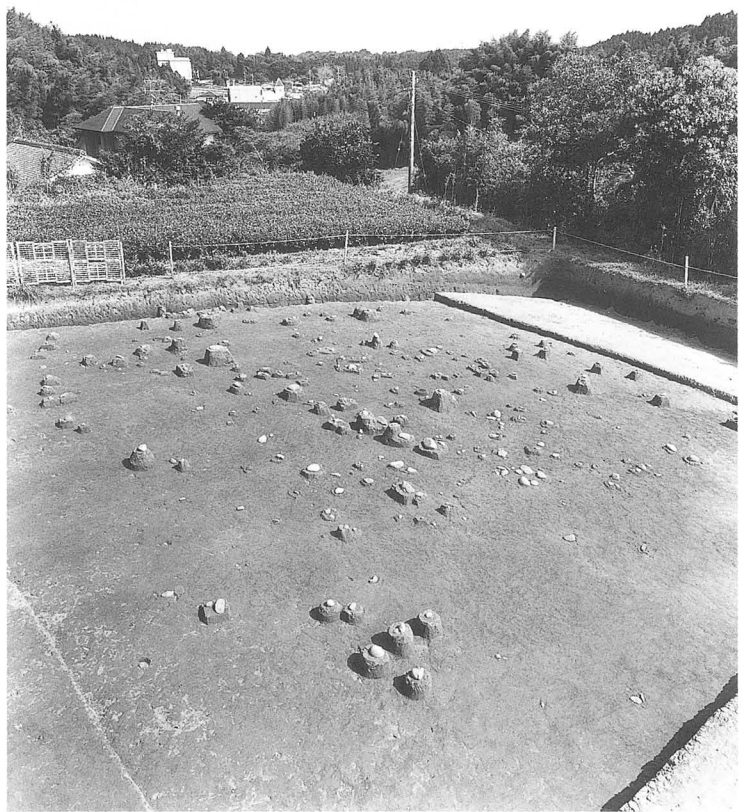
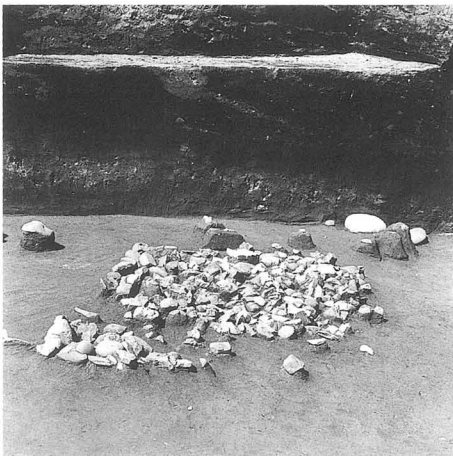


写真49 (上) B区 縄文時代早期集石遺構  
写真50 (下) A区 ML 2 礫群

写真51 A区 MB 2・3 礫群

## 72 ながむた 永牟田第1遺跡

### (1) 遺跡の立地

本遺跡は、一ツ瀬川左岸の深年Ⅱ面に相当する谷状地形部に立地する。標高は75mを測る。

### (2) 調査の概要

本遺跡の基本層序はクロボク（Ⅱ層）、S z-S（桜島薩摩火山灰・谷部のみにもみられる）、黒色土（Ⅳ層）、K-Ah（Ⅴ層）、MB 0（Ⅵ層）、ML 1（Ⅶ層）、Kr-Kb（Ⅷ層）、ML 2（Ⅸ層）、AT（Ⅹ層）褐色土、MB 2（ⅩⅠ層）、粘土層（ⅩⅡ層）となる。

調査当初はKr-Kb（Ⅷ層）・ML 2（Ⅸ層）を調査対象と捉えていた。重機で表土剥ぎを行った結果、南側の埋没した谷地形部にK-Ah以上の層が残存していた。そこで、まず遺跡全体をKr-Kbで揃えることを目的として、まず南側のクロボク土の掘り下げを行った。

### ①後期旧石器時代

MB 2の堆積状況は、北東側で高く、北側と南側に向けて下っていく。層中より礫群が1基検出された。構成礫は尾鈴酸性岩が多い。3箇所程小さな集中部もみられた。遺物はスクレイパー、剥片が出土している。

Kr-Kb（Ⅷ層）を含む層については、パミスの含有率よりa・b二層に細分した。Ⅷa層下部とⅧb層上部に遺物は分布している。明瞭な遺構は検出されなかった。遺物は敲石・磨石や剥片が出土しており、敲石が多いことが特徴としてあげられる。

### ②縄文時代早期

MB 0で集石遺構1基が検出された（S I 1）。集石遺構を検出したⅦ層の上部には礫の集中部がみられ、それを除去したのち集石遺構が確認された。礫は1/2程度赤化しており、掘り込みを持ち、床面には炭化物がみられた。遺物は、石鏃や剥片が出土しているが、土器については、破片が小さく、数量的にも少ない。



写真52 遺跡全景(南より)

### ③K-Ah降灰以降

調査区南側の谷地形部で、クロボクより弥生土器片（中期後半～後期初頭）が出土している。壺や高杯などの器種が認められる。

#### （3）小 結

本遺跡は、谷地形にあるため雨水が溜まりやすく生活の痕跡は少ないと思われていた。しかし調査の

結果、各々の面積は小さいが後期旧石器時代から弥生時代に至る5枚の文化層が確認された。

付近は、ほ場整備が行われており、本来は調査区中央部にもKr-Kb以上の包含層が存在していたと考えられる。



写真53（上） MB 2 礫群検出状況

写真54（下） Kr-Kb 遺物出土状況

写真55（上） S I 1

写真56（下） ML 1 遺物出土状況

## 74 おこぼる 尾小原遺跡 (二次)

### (1) 遺跡の立地

新田原段丘面から南西部に張り出す尾根上に立地する。標高は約70mで、現況は畑地になっている。

一次調査は、現調査区の北東側をA・B・C区に分けて実施され、後期旧石器時代から弥生時代までの複合遺跡であることが判明している。

### (2) 調査の概要

調査区をD区とE区とに分割した。両区とも遺物包含層より上層は耕作により大部分が削平されていた。D区は、黒色土(Ⅱ層)、Kr-Kb(VI層)、E区はKr-Kb、MB1(VII層)、ML2(VIII層)が調査対象となった。

#### ①後期旧石器時代

E区のKr-Kbでは、ナイフ形石器や角錐状石器、剥片等から構成されるブロックが1箇所検出された。

#### ②縄文時代早期

D区のMB0で土坑1基が検出された。円形を呈し、長径約1.6m×短径約1.5m程であった。遺物等の出土はみられなかった。

E区ではKr-Kb層面で陥し穴とみられる遺構が4基検出された。ただし、いずれも埋土中から遺物は出土しておらず、時期は判然としない。

SC1は長径約1.2mの円形プランで、埋土は全体的に黒くて硬くしまっている。底面には小穴がみられる。SC2は、径約1.3mの円形プランで、SC1と隣接していた。埋土の特徴はSC1と同様である。SC3は、径約1.3mの円形プランで、底面には、直径15cm程の小穴が1箇所確認された。SC4は径約1.2mの円形プランで、底面には小穴が数か所確認された。

#### ③弥生時代

方形の竪穴が3基確認された。

SA3は2.0m×2.0mの方形プランで深さ0.2mと浅いものの、分層の結果から、貼床状の土層を確認することができた。また底部には壁帯溝が巡っていた。

SA2はSA3に隣接している。3.2m×2.3mの方形プランで、深さ0.2mであった。中央部には床面からの深さが約15cmのピットがある。遺物は土器の小破片のみであったが、SA3と同様の埋土の特徴を示している。

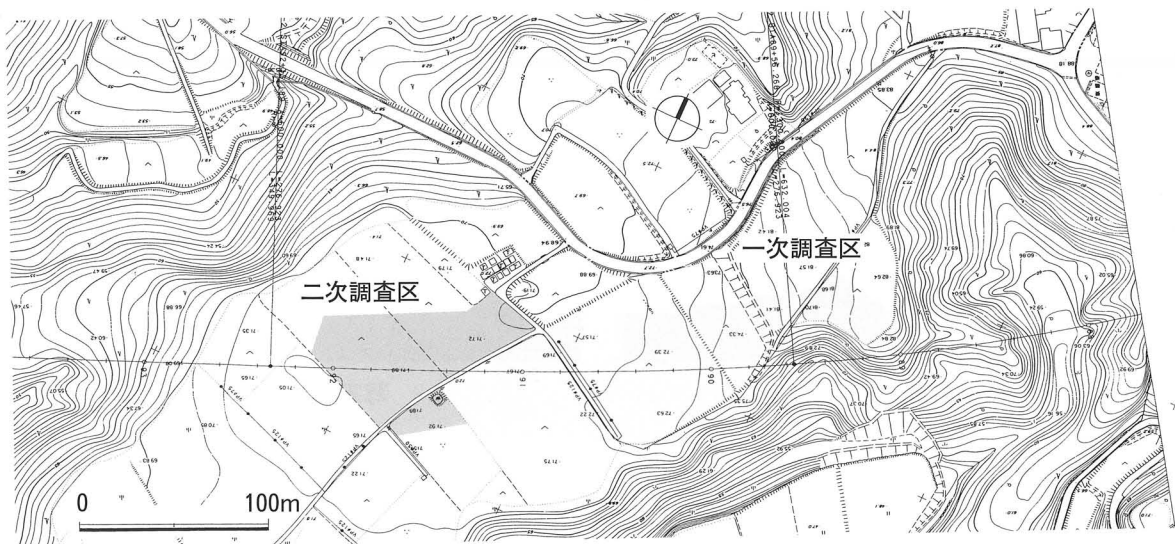


図27 遺跡周辺の地形と調査区(1/4,000)

S A 1はE区中央部やや南側で検出された。表土除去作業中に確認されている。2.3m×1.8mの方形プランを呈し、深さ0.3mを測る。周囲に壁帯溝と思われる溝が巡っていた。

遺構の中央部で弥生時代後期に属する土器や磨製石鏃1点が出土している。土器は比較的まとまって出土しており、出土レベルが床面から約15cm程浮いていることや埋土下層がやや硬くしまっていることから貼床を施していた可能性がある。

### (3) 小 結

E区のKr-Kb上部では、石鏃や剥片等がまとまって出土しており、旧石器時代終末期の石器製作場所であった可能性が考えられる。

陥し穴等の遺構については時代を特定することは難しい。

弥生時代の遺構に関しては、耕作による削平が進んでいるが、当台地上における該期の居住の実態を知る資料となろう。



写真57 S A 1 遺物出土状況



写真58 S A 2・3

### (1) 遺跡の立地

一ツ瀬川右岸の低段丘上に立地する。標高は20m。河岸低地との比高差は約12mを測る。北東約0.5kmのところには有峯城（岡富城）があり、南東には古墳時代～古代の集落である竹淵遺跡が立地する。また、遺跡すぐ東の本蓮寺跡境内付近で、昭和49年4月工事用の土採り場のブルドーザーで押された廃土中から銅鑄製経筒・陶製経筒が発見されている。

遺跡一帯は、昭和50年頃まで集落が営まれ、自衛隊新田原基地関連で移転したのち、杉が密植してあった。

### (2) 確認調査の概要

調査前に表面採集を実施したところ、調査区のほぼ全面にわたって縄文時代から近代までの遺物の散布が認められた。そこで、確認調査は遺物包含層、遺構等の把握を念頭に実施した。

トレンチは2m×5mを基本に任意に設定し、必要に応じて拡張した。掘削は人力を基本とし、必要に応じて重機を用いた。出土遺物は、トレンチごとに層一括で取り上げた。

調査期間は平成15年7月1日から同年9月2日までで、最終調査面積は410㎡である。

本遺跡の層序（包含遺物）は、表土、灰褐色土〈古代から中世・近世〉、黒褐色土・極暗褐色土〈古墳時代から古代〉、暗褐色土〈弥生時代中期から古墳時代〉、Kr-Kb～MB2・3以下からなる。ただし、トレンチによっては、表土下の灰褐色土あるいはKr-Kb等が確認できない。弥生時代から近世の遺物包含層である灰褐色土から暗褐色土は、集落形成等何らかの人間活動にともなって形成されたものと考えられる。

#### ① 里道南側

ほぼ全面にわたって灰褐色土、黒褐色土・極暗褐色土、暗褐色土（以下、遺物包含層）の広がりが確認された。遺物包含層は調査区中央付近でもっとも

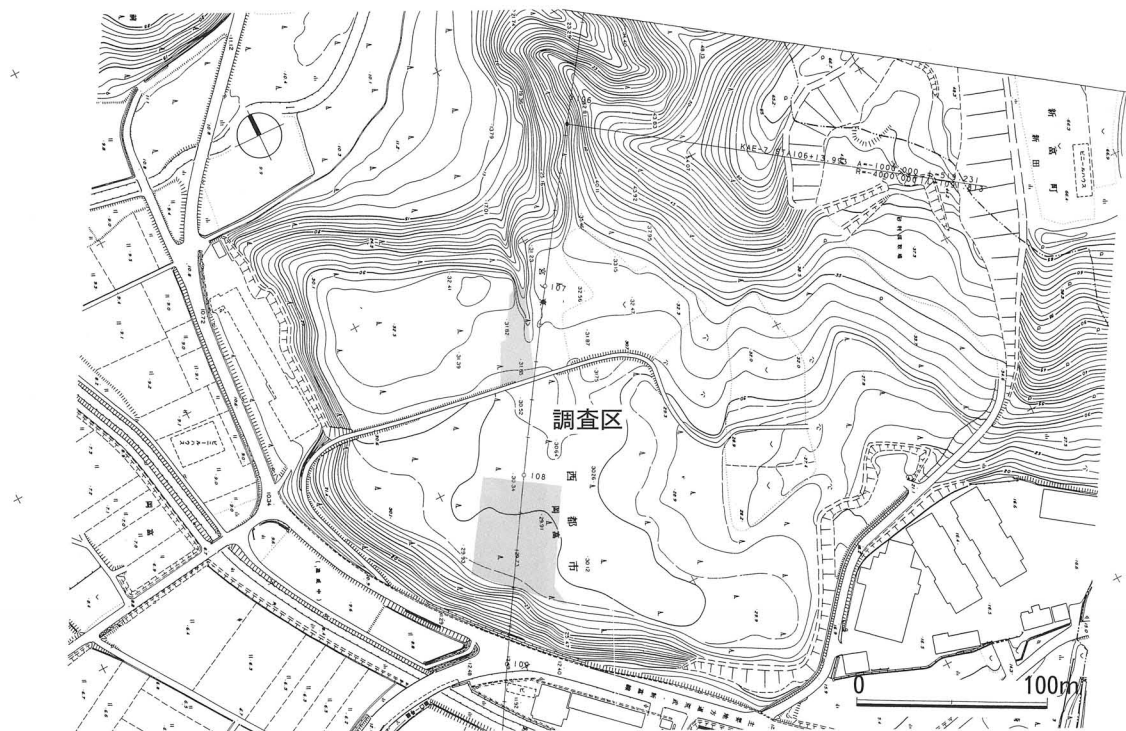


図28 調査区周辺の地形と調査区(1/4,000)